

2009 年度 リサーチペーパー

日本プロ野球界におけるフランチャイズ移転の可能性に関する研究

Research on possibilities of Japanese Baseball

Franchise Transfers

早稲田大学 大学院スポーツ科学研究科

トップスポーツマネジメントコース

5009A331-5

森本 譲二

Morimoto Joji

研究指導教員： 平田竹男 教授

目次

第1章	序論.....	6
第1節	研究背景.....	6
第1項	フランチャイズ移転の歴史	7
第2項	先行研究.....	10
第2節	研究目的.....	11
第2章	研究手法	12
第1節	不振球団の抽出.....	12
第1項	ファン人口の調査	12
第2項	観客動員数の調査	12
第3項	不振球団の特定.....	12
第2節	フランチャイズ移転候補地域の抽出.....	13
第3節	MLB および NPB におけるフランチャイズ移転事例の分析.....	13
第1項	MLB および NPB におけるフランチャイズ移転成功球団の定義.....	13
第2項	移転成功球団における共通事項の抽出	13
第3項	フランチャイズ移転後の観客動員数推移.....	13
第4項	移転地域における 4 大スポーツチームの有無	13
第5項	優遇措置の有無.....	13
第3章	NPB における不振球団抽出とフランチャイズ移転候補地の選出	14
第1節	不振球団の抽出.....	14
第1項	球団別都道府県人口に対するファン人口.....	14
第2項	球団別フランチャイズ地域の都道府県人口に対する観客動員数	17
第3項	不振球団の抽出.....	19
第2節	フランチャイズ都市移転における候補地の選定.....	20
第1項	フランチャイズ移転先候補地域の抽出	20
第4章	MLB および NPB におけるフランチャイズ移転事例の分析.....	23
第1節	MLB および NPB におけるフランチャイズ移転効果.....	25
第1項	MLB におけるフランチャイズ移転前後の観客動員数推移	25
第2項	NPB におけるフランチャイズ移転前後の観客動員数推移	27
第3項	MLB および NPB における移転前後の勝率	29
第2節	MLB および NPB における移転成功球団の抽出	30
第1項	移転成功球団時のメジャー4 大スポーツのフランチャイズ都市調査.....	31
第2項	MLB フランチャイズ都市移転時の優遇措置.....	32
第3項	球団移転時の背景とオーナーの意思決定.....	33
第4項	MLB および NPB におけるフランチャイズ移転後の 1 試合平均観客動員数推移	

第5章	考察.....	37
第1節	移転候補地域におけるファン人口予測.....	37
第1項	推計ファン人口の計算式.....	37
第2項	ファン人口予測数値.....	38
第2節	移転後の観客動員数予測.....	40
第1項	観客動員数予測の計算式.....	40
第3節	移転先候補地の特定と優先順位付け.....	44
第1項	移転候補地域の特定と順位付けの方法.....	44
第4節	フランチャイズ移転先推計ファン人口.....	45
第1項	・オリックスのファン人口予測.....	45
第2項	・スワローズのファン人口予測.....	45
第5節	移転先観客動員数予想について.....	45
第1項	・オリックスの観客動員予測.....	46
第2項	・スワローズの観客動員予測.....	46
第6節	MLB および NPB におけるフランチャイズ移転効果について.....	46
第7節	フランチャイズ移転のポイント.....	47
第8節	オーナーの意思.....	47
第6章	結論.....	48

図表目次

図 1	セ・パ両リーグ 観客動員数	6
図 2	パ・リーグ観客動員数 (2005～2009 年).....	7
図 3	都道府県別プロ野球フランチャイズ	20
図 4	MLB における球団別フランチャイズ移転前後 5 年間の 1 試合観客動員数グラフ	26
図 5	MLB における球団別フランチャイズ移転前後 1 3 年間の 1 試合観客動員数グラフ	26
図 6	NPB における球団別フランチャイズ移転前後 5 年間の 1 試合観客動員数グラフ	27
図 7	ライオンズ、ホークスに関するフランチャイズ移転前後 10 年間の 1 試合観客動員数グラフ	27
図 8	MLB フランチャイズ移転後 13 年間の 1 試合平均観客動員数比較グラフ	36
図 9	NPB フランチャイズ移転後 5 年間の 1 試合平均観客動員数比較グラフ	36
図 10	バファローズに関するフランチャイズ移転後の推計ファン人口	38
図 11	スワローズに関するフランチャイズ移転後の推計ファン人口	39
図 12	バファローズに関するフランチャイズ移転後の推計観客動員数	41
図 13	スワローズに関するフランチャイズ移転後の推計観客動員数	42
表 1	20 世紀後半以降の MLB 所属球団の主な移転と拡張事例 (赤字は移転)	9
表 2	20 世紀後半からの NPB 所属球団の主な移転と拡張事例一覧 (赤字は移転).....	9
表 3	2009 年度 球団別ファン人口の都道府県人口に対する割合	14
表 4	バファローズとスワローズのフランチャイズ周辺地域 (4 県) における都道府県人口に対するファン人口の割合	15
表 5	球団別ファン人口推移 (1999 年と 2009 年を比較)	16
表 6	2009 年 球団別都市人口に対する観客動員数の割合	17
表 7	各球団別の 1 試合あたり平均観客動員数推移 (1999 年と 2009 年を比較)	17
表 8	ファン人口と観客動員数の比較	19
表 9	都道府県別人口に対するプロ野球ファン人口の割合 (1999 年と 2009 年を比較)	21
表 10	3 つのフランチャイズ移転候補地域別プロ野球ファン人口と都道府県人口に対する割合 (1999 年と 2009 年を比較)	22
表 11	MLB におけるフランチャイズ移転球団と移転先都市の一覧	23
表 12	NPB におけるフランチャイズ移転球団と移転先都市の一覧	24

表 13	MLB および NPB のフランチャイズ移転前後の 1 試合あたり平均観客動員数一 覧.....	28
表 14	移転前後の勝率変化.....	29
表 15	フランチャイズ移転球団に関する移転前後の「観客動員数」と「勝率」の成長 率.....	30
表 16	MLB フランチャイズ都市移転時のメジャー4 大スポーツに関するフランチャ イズ本拠地一覧.....	31
表 17	MLB フランチャイズ都市移転時の主な優遇措置事例一覧	32
表 18	MLB および NPB におけるフランチャイズ移転の背景	33
表 19	スワローズに関するフランチャイズ移転後の観客動員数予想数値.....	44

第1章 序論

第1節 研究背景

現在、日本プロ野球人気は地上波放送の減少をはじめ、ファン人口も年々減少していると言われている。また、昨今の経済不況により多くの球団が経営危機を迎えている。

2009年にNPB誕生60周年の節目を迎えたプロ野球界において、今後の更なる発展について考える際、各球団のファン人口および観客動員数の増加施策は不可欠と言えよう。

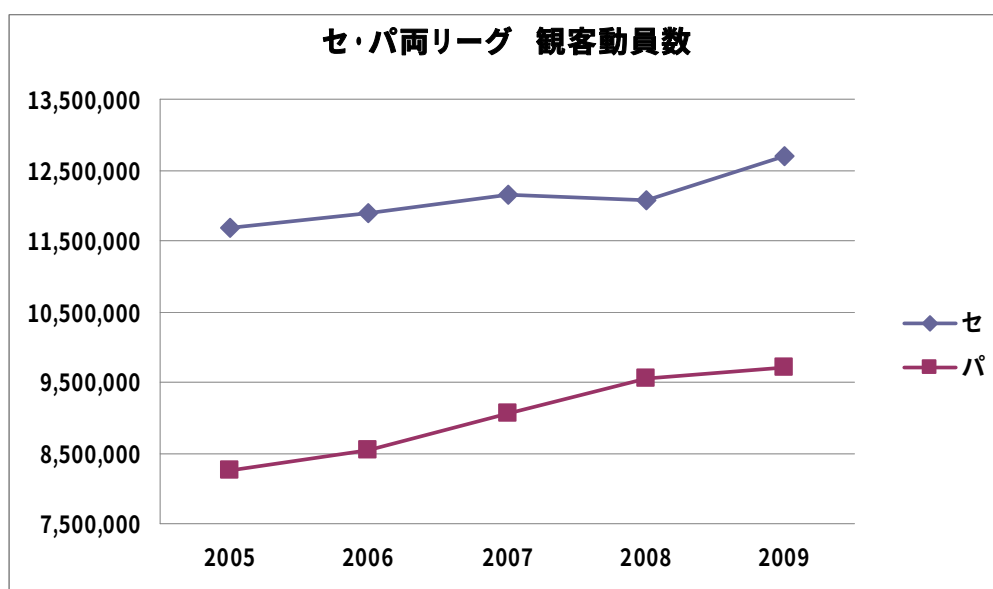


図1 セ・パ両リーグ 観客動員数

図1には、2005年から2009年までの、セ・パ両リーグの観客動員数の推移を示した。図からわかるとおり、セ・パ両リーグの観客動員数を比較すると、2005年と2009年の観客動員数の増加人数は、セ・リーグが1,019,657人なのに対して、パ・リーグが1,455,409人と、パ・リーグの方が伸びている事が分かる。

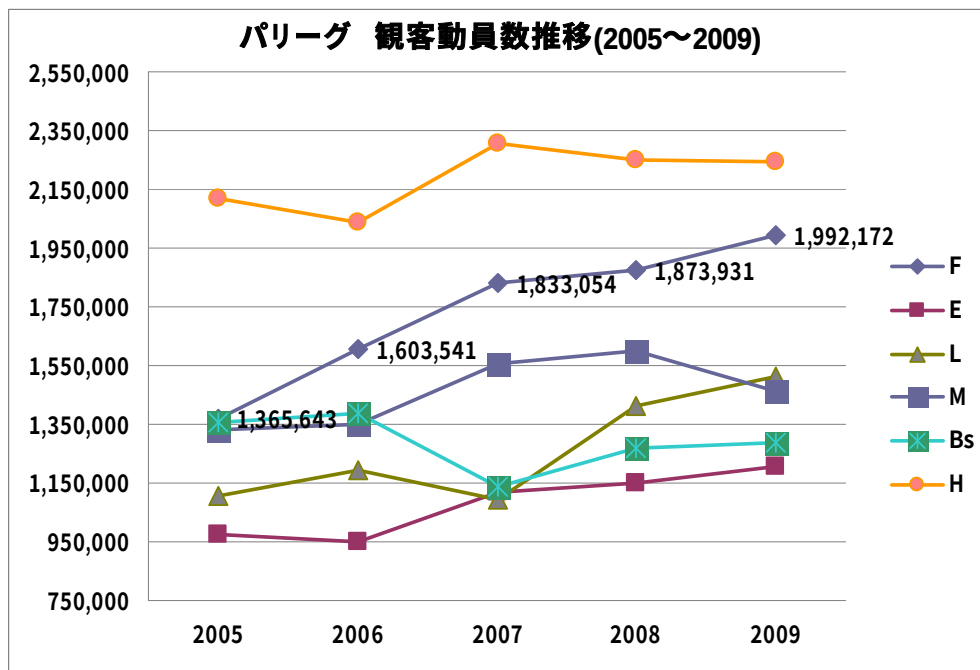


図 2 パ・リーグ観客動員数 (2005～2009 年)

図 2 には、2005 年から 2009 年までのパ・リーグ各球団の観客動員数を示した。図からは、ファイターズのフランチャイズ移転時期である 2005 年から 2009 年の観客動員数が 147%と最もパ・リーグ内で増加している事が読み取れる。

この結果より、筆者はプロ野球球団の観客動員数増加に関して、フランチャイズ移転が影響を与えているのではないかと考えた。

第1項 フランチャイズ移転の歴史

これまでに日本プロ野球界では、幾度となくフランチャイズ球団の本拠地（地域）移転が行われてきた。例えば 1989 年に当時大阪を本拠地としていた「南海ホークス」は同じく「阪神タイガース」とのダブルフランチャイズにおける競合関係に終止符を打ち、福岡を本拠地とする「福岡ダイエーホークス」としてフランチャイズ都市を移転させるなど、日本プロ野球発足から 60 年の間にフランチャイズの移転と新規球団の参入と言う形でプロ野球球団の本拠地が変えられてきた。近年ではそれまで東京を本拠地としていた「日本ハムファイターズ」が 2004 年にプロ野球未開拓の地であった北海道（札幌市）へフランチャイズを移転させ、「北海道日本ハムファイターズ」として 2005 年以降、集客の面でもチームの勝利という点でも成功を納めている。

また、海外では MLB（メジャーリーグベースボール）において、かつて 1958 年に「ドジャース」がロサンゼルスへ、「ジャイアンツ」はサンフランシスコへと、共にニューヨークからフランチャイズを移転させた事例がある。当初西海岸にチームが無かったメジャーリ

ーグにとってはプロ野球チームの無かった新しい地域でのフランチャイズ運営は画期的、かつ、かなりチャレンジングな取り組みではあったが、ニューヨークで「ヤンキース」を含めた 3 チームが競合関係が続けるよりも、結果的に移転した 2 チームともファン人口の拡大や集客・売上といった面でも大成功を収めた。更に近年の事例ではエクスポズが 2005 年より本拠地をカナダ・モントリオールから、アメリカ合衆国・首都ワシントン D.C.に移転させ、球団名をワシントン・ナショナルズと改名し運営を行なっており、こちらも集客・売上ともにエクスポズ時代よりも上回っている。これらのことより、フランチャイズ都市の移転は MLB リーグ全体にとっては新しいファンを新規開拓する事に繋がり、中長期的な視点で見るとリーグの発展に貢献する重要な要素であると考えられている。

表 1 20 世紀後半以降の MLB 所属球団の主な移転と拡張事例 (赤字は移転)

1953年	ボストン・ブレーブス(N), ミルウォーキーに移転。
54年	セントルイス・ブラウンズ(A), ボルティモアに移転。オリオールズへ。
55年	フィラデルフィア・アスレティックス(A), カンザスシティに移転。
58年	ブルックリン・ドジャース(N), ロサンゼルスに移転。
	ニューヨーク・ジャイアンツ(N), サンフランシスコに移転。
61年	ワシントン・セネタ-ズ(A), ミネアポリスに移転。ミネソタ・ツインズへ。
	ワシントンに2代目ワシントン・セネタ-ズ(A)創設。
	ロサンゼルス・エンゼルス(A)創設。
62年	ヒューストン・コルト45s(N, のちにアストロズ)創設。
	ニューヨーク・メッツ(N)創設。
66年	ミルウォーキー・ブレーブス, アトランタに再移転。
	ロサンゼルス・エンゼルス, アナハイムに移転。カルフォルニア・エンゼルスへ。
68年	カンザスシティ・アスレティックス, オークランドに再移転。
69年	カンザスシティ・ロイヤルズ(A)創設。
	シアトル・パイロッツ(A)創設。
	モントリオール・エクスポズ(N)創設。
	サンディエゴ・パドレス(N)創設。
70年	シアトル・パイロッツ, ミルウォーキーに移転。ブリューワーズ(当時A, 98年にN)へ。
	ワシントン・セネタ-ズ, ダラス-フォートワースに移転。テキサス・レンジャーズへ。
77年	シアトル・マリナーズ(A)創設。
	トロント・ブルージェイズ(A)創設。
93年	デンバーにコロラド・ロッキーズ(N)創設。
	マイアミにフロリダ・マーリンズ(N)創設。
98年	タンパ湾地区にタンパベイ・デビルレイズ(A)創設。
	フェニックスにアリゾナ・ダイヤモンドバックス(N)創設。
2005年	モントリオール・エクスポズ, ワシントンに移転。ナショナルズへ。

※ (N)はナショナル・リーグ, (A)はアメリカン・リーグ。

表 2 20 世紀後半からの NPB 所属球団の主な移転と拡張事例一覧 (赤字は移転)

1978年	大洋ホエールズが川崎から横浜へ移転。横浜ベイスターズ (C)へ。
79年	西鉄ライオンズが福岡から埼玉へ移転。西武ライオンズ (P) へ。
89年	南海ホークスが大阪から福岡へ移転。福岡ダイエーホークス (P)へ。
92年	ロッテオリオンズが川崎から千葉へ移転。千葉ロッテマリーンズ (P) へ。
2004年	日本ハムファイターズが東京から北海道へ移転。北海道日本ハムファイターズ (P) へ。
2005年	大阪近鉄バファローズ消滅。東北楽天ゴールデンイーグルス (P) が宮城に新設。

※イーグルスは新設球団であるが、今回は近鉄からの実質的な移転ととらえた。

※ (C)はセントラルリーグ、(P) パシフィックリーグ。

第2項 先行研究

Cocco and Jones(1997)は、カナダの NHL チームが国内の別の都市にフランチャイズ移転を行なった場合に、収益がどのように変化するかを予測する研究を行った。また、Cocco and Jones の研究では、カナダの Quebec と Winnipeg にフランチャイズを持つ NHL のチームが、カナダ国内の都市にフランチャイズ移転した場合には、チームが収益を拡大する可能性は著しく低い、同チームがアメリカの都市にフランチャイズ移転した場合には、収益を増やす可能性が高いという結果を導き出し、その理由として、カナダの都市と比べ、アメリカの都市の方が人口が多い点を挙げている。

また、Foster and Hyatt(2007)は、フランチャイズを移転したプロスポーツチームがチーム名やロゴを変えた場合と変えなかった場合にファンに及ぼす影響が異なるのかについて研究を行なった。分析対象として、Hartford から North Carolina へフランチャイズを移転する際にチーム名及びロゴを変えた NHL の Whalers と、Vancouver から Memphis にフランチャイズを移転する際にチーム名やロゴを残した NBA の Grizzlies を比較した。その結果、Whalers のファンよりも Grizzlies のファンの方が移転後もチームに対する愛着が強いことが明らかになっている。

MLB のフランチャイズ移転についての事例は国内でも取り扱われており、特に宇佐見陽著「大リーグと都市の物語」では、過去にフランチャイズ移転を行った球団の時代背景、経営状況、移転先都市の優遇措置など調査し、移転に至る経緯が詳しく述べられている。

一方で、MLB および NPB のフランチャイズ移転に関する先行研究は、いずれの事例についてもほとんど行われておらず、研究対象になっていたとしても地域活性化を目的とした、フランチャイズ移転についての研究事例が多い。

このように、海外の先行研究ではアメリカの 4 大スポーツリーグ、特に NHL のフランチャイズ移転についての研究が多く行われてきたが、国内外問わず、フランチャイズ移転都市の選定、および移転後の観客動員数やファン人口の予測に関する具体的な研究はあまり行なわれていないのが現状である。

第2節 研究目的

前述のように筆者は、現在観客動員数が低迷し、ファン人口が減少している球団の存在などから、プロ野球界の将来について危機感を抱くに至った。

そこで、客観的な事実およびデータから、日本プロ野球界の活性化に向けた改善策や取り組み案を提案する事で、今後のリーグ発展に貢献したいと考えた。

以上の背景を踏まえ、本稿では、NPB 活性化に向けた改善策の一つとして、「フランチャイズ本拠地の移転」に焦点をあて、不振球団の移転候補地域を選定し、NPB における効果的なフランチャイズ移転の有り方を提言することを目的とする。

第2章 研究手法

本研究の目的は、NPB における効果的なフランチャイズ移転の有り方を提言することで、NPB の活性化をはかることである。

そこで、まず NPB における観客動員数および、ファン人口の増減率を分析することにより、不振球団の特定後、移転候補地域を選定する。次に、MLB と NPB におけるフランチャイズ移転事例の分析を通して、不振球団が仮に日本国内でフランチャイズ移転を行なう場合、重要と考えられる要素を導き出す。

第1節 不振球団の抽出

以下の分析ステップによって、不振球団を抽出する。

第1項 ファン人口の調査

都道府県別プロ野球ファン人口を明らかにする為に、日本国内にてアンケート調査を行い、各球団における 1999 年と 2009 年の都道府県別ファン人口を比較し、フランチャイズ都市を中心としたプロ野球ファン人口の増減を調査する。

今回のアンケート調査における調査会社では「楽天リサーチ」を活用し、2009 年 9 月に全国エリアを対象として、WEB（インターネット）を使った覆面調査を行なった。調査サンプルはスクリーニング済みである 15 歳～80 歳まで（未婚・職業の指定なし）の一般男女 47,519 人を調査対象として実施する。

第2項 観客動員数の調査

観客動員数を明らかにする為に、日本プロ野球機構が公開しているデータより、1999 年から 2009 年までの球団別観客動員数をもとに調査した。

第3項 不振球団の特定

ファン人口のアンケート調査から得られたデータを使い、各球団に関する 1999 年と 2009 年のファン人口の増減分析を行なう。また、スタジアムを構えるフランチャイズ本拠地（周辺地域を含む）の都道府県別人口に対する、ファン人口の割合が少ない球団を特定する。

次に、1999 年と 2009 年を比べ、1 試合あたり平均観客動員数がセ・パ両リーグの中で低迷している球団を調査するとともに、フランチャイズ本拠地の都道府県人口に対する観客動員数の割合が少ない球団を調査する。

以上の調査手順により、本研究における「不振球団」を定義する。

第2節 フランチャイズ移転候補地域の抽出

フランチャイズ移転の候補地となる地域を抽出する。

ダブルフランチャイズとならないよう、既存球団のフランチャイズ都市およびそれらの商圏内に該当する都道府県を調査対象外とし、都道府県人口に対するプロ野球ファン人口の割合が高い地域を抽出する。

第3節 MLB および NPB におけるフランチャイズ移転事例の分析

MLB と NPB におけるフランチャイズ移転事例の分析を通して、不振球団が仮に日本国内でフランチャイズ移転を行なう場合、重要と考えられる要素を導き出す。

第1項 MLB および NPB におけるフランチャイズ移転成功球団の定義

MLB および NPB におけるフランチャイズ移転前後の観客動員数推移と、球団の勝率について分析を行い、それらの結果から「移転成功球団」を定義する。

第2項 移転成功球団における共通事項の抽出

移転成功球団における共通項を調査し、フランチャイズ移転を行う際に参考となる事項を抽出する。

第3項 フランチャイズ移転後の観客動員数推移

移転後の観客動員数の推移を分析し、各球団の増減率に関する共通事項を抽出する

第4項 移転地域における4大スポーツチームの有無

MLB 球団が他の4大スポーツがフランチャイズ展開している都市に移転しているのかを調査し、他競技とのダブルフランチャイズの有無を分析する。

第5項 優遇措置の有無

移転時に州および市から優遇措置を受ける契約を行なっていたかどうかを調査するとともに、移転に至る背景を確認する。

第3章 NPB における不振球団抽出とフランチャイズ移転候補

地の選出

第1節 不振球団の抽出

第1項 球団別都道府県人口に対するファン人口

表 3 2009 年度 球団別ファン人口の都道府県人口に対する割合

(単位:千人)

	北海道	宮城県	埼玉県	千葉県	東京都	
	ファイターズ	イーグルス	ライオンズ	マリーンズ	ジャイアンツ	スワローズ
(都道府県) 人口	5,542	2,343	7,137	6,147	12,898	
ファン人口	2,959	1,302	576	575	1,827	281
ファン人口／人口	53.4%	55.6%	8.1%	9.4%	14.2%	2.2%

	神奈川県	愛知県	大阪府		広島県	福岡県
	ベイスターズ	ドラゴンズ	タイガース	バファローズ	カープ	ホークス
(都道府県) 人口	8,956	7,398	8,833		2,870	5,060
ファン人口	687	2,764	3,197	95	1,499	2,417
ファン人口／人口	7.7%	37.4%	36.2%	1.1%	52.2%	47.8%

12 球団が本拠地を置くフランチャイズ都市（都道府県）別にファン人口とフランチャイズ都市（都道府県別）人口の割合を見ると、同じ東京都をフランチャイズ本拠地とする「読売ジャイアンツ」が 14.2%であるのに対して「東京ヤクルトスワローズ」は 2.2%という結果となった。同じく大阪では「阪神タイガース」が 36.2%であるのに対して「オリックス・ブルーウェーブ」が 1.1%と同じフランチャイズ都市を本拠地としながら、大きな差がある事が分かった。さらに、首都圏では「ジャイアンツ」と競合関係にある「スワローズ」、「ライオンズ」、「ベイスターズ」、「マリーンズ」、および、近畿地方（大阪府）において「タイガース」と競合関係にある「バファローズ」の計 5 球団がフランチャイズ都市の人口におけるファン人口の占める割合が、他球団のそれと比べ低い事が読み取れる。

表 4 バファローズとスワローズのフランチャイズ周辺地域（4 県）における都道府県人口に対するファン人口の割合

(単位:千人)

都道府県	2009年人口	オリックス・バファローズファン人口	2009年の人口に対するファン数の割合
京都府	2,635	14	0.5%
大阪府	8,833	95	1.1%
兵庫県	5,596	86	1.5%
奈良県	1,405	12	0.9%
合計	18,469	206	1.1%

(単位:千人)

都道府県	2009年人口	ヤクルトスワローズファン人口	2009年の人口に対するファン数の割合
埼玉県	7,137	114	1.6%
千葉県	6,147	74	1.2%
東京都	12,898	281	2.2%
神奈川県	8,956	136	1.5%
合計	35,138	606	1.7%

続いて、フランチャイズ本拠地が置かれている都市を含めた、各チームを取り巻くフランチャイズ地域（周辺都道府県）のファン人口割合を見てみると、バファローズはフランチャイズ本拠地である「大阪府」を含めた「京都府」、「兵庫県」、「奈良県」と周辺 4 県を合わせたファン人口が約 20 万 6 千人となり、同地域におけるファン人口と都道府県（地域合計）の人口割合は 1.1%となっている事が分った。また、スワローズでは同じくフランチャイズ本拠地である「東京都」を含めた「埼玉県」、「千葉県」、「神奈川県」と周辺 4 都道府県のファン人口が約 60 万 6 千人となり、ファン人口と都道府県（地域合計）の人口割合は 1.7%という結果となった事からも明らかな通り、バファローズとスワローズは周辺地域を含めた分析結果からもフランチャイズ地域の人口に対するファン人口の割合が非常に少ない事が分った。

表 5 球団別ファン人口推移 (1999 年と 2009 年を比較)

■パ・リーグ各球団の1999年と2009年を比較したファン人口の増減表

(単位:万人)

	埼玉西武ライオンズ	オリックス・バファローズ	北海道日本ハムファイターズ	千葉ロッテマリーンズ	東北楽天ゴールデンイーグルス(近鉄バファローズ)	福岡ソフトバンクホークス
	北海道	宮城県	埼玉県	千葉県	宮城県	福岡県
1999年	399	122	58	81	93	395
2009年	220	55	411	129	960	421
差異 (99→09)	▲ 180	▲ 67	352	48	867	26
増加率 (99→09)	-45%	-55%	604%	60%	929%	7%

■セ・リーグ各球団の1999年と2009年を比較したファン人口の増減表

(単位:万人)

	読売ジャイアンツ	阪神タイガース	中日ドラゴンズ	広島東洋カープ	ヤクルトスワローズ	横浜ベイスターズ
	東京都	大阪府	愛知県	広島県	東京都	神奈川県
1999年	2,411	1,475	624	324	315	252
2009年	1,413	1,391	583	303	134	176
差異 (99→09)	▲ 998	▲ 84	▲ 41	▲ 21	▲ 181	▲ 76
増加率 (99→09)	-41%	-6%	-7%	-7%	-58%	-30%

※ 本稿では「大阪近鉄バファローズ」は2004年に消滅したが、翌年に「東北楽天ゴールデンイーグルス」が同じパ・リーグに新規参入した為、大阪からの移転扱いとした。

12 球団個別に 1999 年と 2009 年の推計ファン人口を比較し、その増減を分析した結果、パ・リーグでは「埼玉西武ライオンズ」が 10 年前と比べ全国で約 180 万人ファン人口が減少（－45％）し、さらに「オリックス・バファローズ」も 10 年前と比較して約 67 万人ファン人口が減少（－55％）となっている事が分った。一方、セ・リーグでは、全球団のファン人口が減少しており、特に「読売ジャイアンツ」、「ヤクルトスワローズ」と「横浜ベイスターズ」に関するファン人口の減少が著しく、ジャイアンツは 10 年前と比較して約 1,000 万人近いファンが減少（－41％）となり、スワローズも約 181 万人のファンが減少（－58％）し、ベイスターズも約 76 万人のファンが減少（－30％）となっている事が読み取れる。

また、ここで非常に興味深いのが、セ・パ両リーグともこの 10 年間で著しくファン人口が減っている球団はいずれも関東圏もしくは近畿地方にフランチャイズ本拠地を置く球団であり、地方にフランチャイズ本拠地を置く球団は、全体的に減少傾向にあるパ・リーグの球団であっても、さほど目立った減少となっていない事が明らかとなった。

第2項 球団別フランチャイズ地域の都道府県人口に対する観客動員数

表 6 2009 年 球団別都市人口に対する観客動員数の割合

(単位:人)

	北海道	宮城県	埼玉県	千葉県	東京都	
	ファイターズ	イーグルス	ライオンズ	マリーンズ	ジャイアンツ	スワローズ
人口	5,542,740	2,343,767	7,137,434	6,147,347	12,898,939	
観客動員数	1,992,172	1,203,169	1,515,045	1,465,189	2,934,370	1,332,366
人口/観客動員数	35.9%	51.3%	21.2%	23.8%	22.7%	10.3%

	神奈川県	愛知県	大阪府		広島県	福岡県
	ベイスターズ	ドラゴンズ	タイガース	バファローズ	カープ	ホークス
人口	8,956,804	7,398,327	8,833,777		2,870,037	5,060,711
観客動員数	1,246,967	2,298,405	3,007,074	1,285,907	1,873,046	2,245,969
人口/観客動員数	13.9%	31.1%	34.0%	14.6%	65.3%	44.4%

各球団のフランチャイズ本拠地都道府県における年間観客動員数の割合を見てみると、「スワローズ」および「バファローズ」は、いずれも所属リーグの中で最も値が低い事が分かった。

表 7 各球団別の 1 試合あたり平均観客動員数推移 (1999 年と 2009 年を比較)

■パ・リーグ各球団の1999年と2009年を比較した1試合あたり平均観客動員数の増減表

(単位:人)

	埼玉西武ライオンズ	オリックス・バファローズ	北海道日本ハムファイターズ	千葉ロッテマリーンズ	東北楽天ゴールデンイーグルス(近鉄バファローズ)	福岡ソフトバンクホークス
	北海道	宮城県	埼玉県	千葉県	宮城県	福岡県
1999年	26,971	17,735	20,824	15,735	16,985	35,147
2009年	21,042	17,860	27,669	20,350	16,711	31,194
差異(99→09)	-5,928	125	6,846	4,615	-275	-3,953
増加率(99→09)	78.0%	100.7%	132.9%	129.3%	98.4%	88.8%

■セ・リーグ各球団の1999年と2009年を比較した1試合あたり平均観客動員数の増減表

(単位:人)

	読売ジャイアンツ	阪神タイガース	中日ドラゴンズ	広島東洋カープ	ヤクルトスワローズ	横浜ベイスターズ
	東京都	大阪府	愛知県	広島県	東京都	神奈川県
1999年	53,603	38,250	37,368	15,684	25,235	26,029
2009年	40,755	41,765	31,922	26,015	18,505	17,319
差異(99→09)	-12,848	3,515	-5,445	10,331	-6,730	-8,710
増加率(99→09)	76.0%	109.2%	85.4%	165.9%	73.3%	66.5%

※ 本稿では「大阪近鉄バファローズ」は2004年に消滅したが、翌年に「東北楽天ゴール

デンイーグルス」が同じパ・リーグに新規参入した為、大阪からの移転扱いとした。

※ 1999 年は年間のホームゲームが 68 試合、2009 年は 75 試合であった為、1 試合平均の増減率で比較を行った。

球団別 1 試合あたり観客動員数で比較しても、スワローズは 2009 年で 18,505 人とセ・リーグ 6 球団の中で 5 位、オリックスは 17,860 人とこちらも同じくパ・リーグ 6 球団中 5 位と低迷している事が分かる。特にヤクルトに関しては、10 年前と現在を比較したセ・リーグ全体の観客動員数増加率が約 104.7%であるのに対して、ヤクルト単体で見ると約 73.3%と年間観客動員数の落ち込みも著しく低下している事が読み取れる。

また、パ・リーグにおいて、ソフトバンク、ライオンズが 1999 年と 2009 年を比較して大きく落ち込んでいるのは、1999 年に当時のダイエーホークスが西武ライオンズとの優勝争いを制し、シーズン中から旧西鉄ライオンズファンが多くいる福岡地域、また、関東でも多くのホークスファンが西武球場へ来場した事が原因であると推測される

第3項 不振球団の抽出

表 8 ファン人口と観客動員数の比較

■パ・リーグ各球団の数値

	埼玉西武ライオンズ	オリックス・バファローズ	北海道日本ハムファイターズ	千葉ロッテマリーンズ	イーグルス(大阪近鉄バファローズ)	福岡ソフトバンクホークス	
ファン人口2009年	2,195,179	546,634	4,105,157	1,287,723	9,601,748	4,206,706	(人)
ファン人口比較	-45.1%	-55.1%	603.7%	59.8%	1028.7%	6.6%	(%)
観客動員数2009年	1,515,045	1,285,907	1,992,172	1,465,189	1,203,169	2,245,969	(人)
観客動員数比較	78.0%	100.7%	132.9%	129.3%	98.4%	88.8%	(%)

■セ・リーグ各球団の数値

	読売ジャイアンツ	阪神タイガース	中日ドラゴンズ	広島東洋カープ	ヤクルトスワローズ	横浜ベイスターズ	
ファン人口2009年	14,132,546	13,910,003	5,825,003	3,027,013	1,335,256	1,760,896	(人)
ファン人口比較	-41.4%	-5.7%	-6.6%	-6.5%	-57.6%	-30.0%	(%)
観客動員数2009年	2,934,370	3,007,074	2,298,405	1,873,046	1,332,366	1,246,967	(人)
観客動員数比較	76.0%	109.2%	85.4%	165.9%	73.3%	66.5%	(%)

※上記「赤字」はリーグ最低数値、「青字」は下から2番目の数値を表している。

これまでの分析結果を【表8】にまとめてみると、ファン人口についてはスワローズが全国のファン人口が約134万人、バファローズは約55万人といずれもファン人口の総数が12球団内でも最下層にランクされている。また、この2球団は10年前と現在を比較したファン人口割合の増減率を見ても、最も低下している事が分かる。さらには、2009年の観客動員数を見ても、いずれも各リーグ内で低迷しており、スワローズに至っては10年前と現在を比較した、1試合あたり平均観客動員数の割合もかなり減少している。以上より、この2球団を本稿における「不振球団」、つまり地域展開におけるフランチャイズ移転を必要とする球団として定義する。

第2節 フランチャイズ都市移転における候補地の選定

第1項 フランチャイズ移転先候補地域の抽出

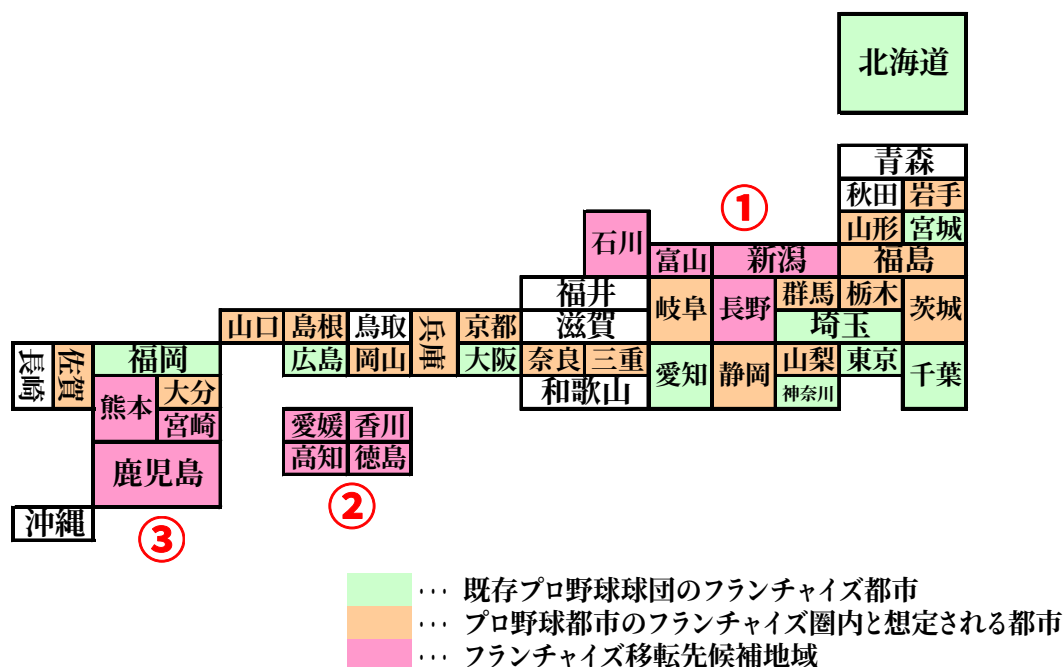


図3 都道府県別プロ野球フランチャイズ

これまで見てきたように、仮に「バッファローズ」と「スワローズ」を不振球団とした場合、これからフランチャイズ移転する際に、どの地域（都市）への移転が望ましいのか。本稿では、まず既存12球団のフランチャイズ都市を除き、更に既存プロ野球球団のフランチャイズ都市の圏内と思われる都道府県は対象外とした。また、1都道府県を対象とした分析ではなく、3～4都道府県を商圈の対象とした地域への移転を想定し、分析を行なった。

その結果、まず既存プロ野球球団のフランチャイズ都市との間にある程度の距離が有り、直接的な商圈内に属していない地域を調査したところ、以下の3地域が抽出された。

- ① 「新潟県」「富山県」「石川県」「長野県」の4県をまとめた「北信越地域」
- ② 「徳島県」「香川県」「愛媛県」「高知県」の4県をまとめた「四国地域」
- ③ 「熊本県」「宮崎県」「鹿児島県」の3県をまとめた「南九州地域」

次に、上記3地域における都道府県人口に対するプロ野球ファン人口の割合を確認する為、全都道府県を各地域に分け、一覧にした。

表 9 都道府県別人口に対するプロ野球ファン人口の割合（1999 年と 2009 年を比較）

(単位:千人)

	都道府県名	1999年人口	2009年人口	1999年度プロ野球ファン人口	2009年度プロ野球ファン人口	1999年の人口に対するプロ野球ファン人口の割合	2009年の人口に対するプロ野球ファン人口の割合
北海道／東北地方	北海道	5,689	5,542	2,414	3,554	42%	64%
	青森県	1,475	1,394	583	598	40%	43%
	岩手県	1,414	1,388	628	688	44%	50%
	宮城県	2,346	2,343	1,053	1,525	45%	65%
	秋田県	1,199	1,109	516	519	43%	47%
	山形県	1,250	1,189	536	586	43%	49%
	福島県	2,129	2,055	979	1,039	46%	51%
	合計	15,502	20,769	6,708	8,508	43%	41%
関東地方	茨城県	2,961	2,968	1,340	1,171	45%	39%
	栃木県	1,985	2,014	959	832	48%	41%
	群馬県	1,995	2,012	892	790	45%	39%
	埼玉県	6,833	7,137	3,495	3,105	51%	43%
	千葉県	5,832	6,147	3,063	2,785	53%	45%
	東京都	11,639	12,898	6,247	5,423	54%	42%
	神奈川県	8,298	8,956	4,427	3,879	53%	43%
	合計	39,543	42,132	20,422	17,983	52%	43%
中部地方	新潟県	2,484	2,395	1,079	951	43%	40%
	富山県	1,119	1,101	485	421	43%	38%
	石川県	1,179	1,169	624	505	53%	43%
	福井県	821	812	406	354	49%	44%
	山梨県	881	872	451	391	51%	45%
	長野県	2,185	2,173	1,044	926	48%	43%
	岐阜県	2,089	2,098	1,237	1,176	59%	56%
	静岡県	3,718	3,798	1,813	1,567	49%	41%
	愛知県	6,870	7,398	4,235	4,111	62%	56%
	合計	21,346	21,816	10,294	9,450	48%	43%
近畿地方	三重県	1,837	1,869	972	896	53%	48%
	滋賀県	1,305	1,401	783	763	60%	54%
	京都府	2,590	2,635	1,419	1,322	55%	50%
	大阪府	8,639	8,833	4,962	4,692	57%	53%
	兵庫県	5,383	5,596	3,283	3,057	61%	55%
	奈良県	1,439	1,405	788	729	55%	52%
	和歌山県	1,072	1,012	560	542	52%	54%
	合計	22,265	22,751	12,768	12,000	57%	53%
中部地方	鳥取県	612	594	276	259	45%	44%
	島根県	762	725	379	345	50%	48%
	岡山県	1,946	1,948	973	913	50%	47%
	広島県	2,865	2,870	1,861	1,861	65%	65%
	山口県	1,532	1,464	787	725	51%	50%
	合計	7,717	7,601	4,277	4,102	55%	54%
四国	徳島県	829	794	361	367	44%	46%
	香川県	1,025	1,003	518	471	51%	47%
	愛媛県	1,498	1,444	725	643	48%	45%
	高知県	810	773	357	331	44%	43%
	合計	4,162	4,014	1,962	1,811	47%	45%
九州	福岡県	4,963	5,060	3,040	3,097	61%	61%
	佐賀県	882	855	449	458	51%	54%
	長崎県	1,526	1,441	755	673	49%	47%
	熊本県	1,862	1,822	886	780	48%	43%
	大分県	1,224	1,201	640	618	52%	51%
	宮崎県	1,174	1,136	608	585	52%	52%
	鹿児島県	1,788	1,720	891	804	50%	47%
	沖縄県	1,295	1,377	643	564	50%	41%
	合計	14,714	14,612	7,911	7,579	54%	52%

さらに、【表 9】から、先にあげた移転候補地域である 3 箇所の地域人口に対するプロ野球ファン人口の割合を分析した。

表 10 3つのフランチャイズ移転候補地域別プロ野球ファン人口と都道府県人口に対する割合（1999 年と 2009 年を比較）

	(単位:千人)					
	1999年人口	2009年人口	1999年ファン数	2009年ファン数	1999年の人口に対するファン人口の割合	2009年の人口に対するファン人口の割合
① 北信越地域 (4県合計)	6,967	6,838	3,232	2,803	46%	41%
② 四国地域(4 県合計)	4,162	4,014	1,962	1,811	47%	45%
③ 南九州地域 (3県合計)	4,824	4,678	2,384	2,169	49%	46%

ここで取り上げた 3 箇所は、1999 年に対する 2009 年のファン数の減少幅が他の地域と比べて少ないことがわかる。上記表からも分る通り、移転候補 3 地域は、いずれも人口に対するプロ野球ファンの割合が 40%以上となっており、地域内におけるプロ野球に対する関心の高さが伺える。また、地域人口もこの 10 年間ほぼ横ばいと安定している事から、フランチャイズ移転を行なうにあたっての移転先候補地域とした。

第4章 MLB および NPB におけるフランチャイズ移転事例の分析

本章では、MLB と NPB におけるフランチャイズ移転事例の分析を通して、不振球団が仮に日本国内でフランチャイズ移転を行なう場合、重要と考えられる要素を導き出す。

表 11 MLB におけるフランチャイズ移転球団と移転先都市の一覧

移転年度	チーム名	所属リーグ	移転前都市名	移転先都市名
1953年	ブレーブス	N	ボストン	ミルウォーキー
54年	ブラウンズ (現オリオールズ)	A	セントルイス	ボルチモア
55年	アスレチックス	A	フィラデルフィア	カンザスシティ
58年	ドジャース	N	ブルックリン	ロサンゼルス
	ジャイアンツ	N	ニューヨーク	サンフランシスコ
61年	セネターズ (現ツインズ)	A	ワシントン	ミネアポリス
66年	ブレーブス	N	ミルウォーキー	アトランタ
	エンゼルス	A	ロサンゼルス	アナハイム
68年	アスレチックス	A	カンザスシティ	オークランド
70年	パイロッツ (現ブリュワーズ)	98年A⇒N	シアトル	ミルウォーキー
72年	セネターズ (現レンジャーズ)	A	ワシントン	ダラス-フォートワース
2005年	エクスポズ (現ナショナルズ)	N	モントリオール	ワシントン

※「A」はアメリカンリーグ、「N」はナショナルリーグ

※ 「赤字」が新規都市へのフランチャイズ移転球団

まず、表 11 から分かる通り、MLB における過去のフランチャイズ移転事例を移転先都市で分類すると大きく 2 つに分かれる。前者は以前に他球団がフランチャイズ本拠地を置いていた都市に移転する球団。後者は、過去に MLB の球団が存在したことがない都市に移転する球団である。また、1955 年のアスレチックスがフランチャイズ都市を移転させて以降、MLB 全体として新天地にフランチャイズ都市を移転させる傾向が伺える。

表 12 NPB におけるフランチャイズ移転球団と移転先都市の一覧

移転年度	チーム名	所属リーグ	移転前都市名	移転先都市名
1978年	ホエールズ (現ベイスターズ)	C	川崎	横浜
79年	西鉄ライオンズ (現西武ライオンズ)	P	福岡	埼玉
89年	南海ホークス (現ソフトバンクホークス)	P	大阪	福岡
92年	ロッテオリオンズ (現千葉ロッテマリーンズ)	P	川崎	千葉
2004年	日本ハムファイターズ (現北海道日本ハムファイターズ)	P	東京	札幌
05年	大阪近鉄バファローズ⇒東北楽天ゴールデンイーグルス (新設)	P	大阪	仙台

※「P」はパシフィックリーグ、「C」はセントラルリーグ

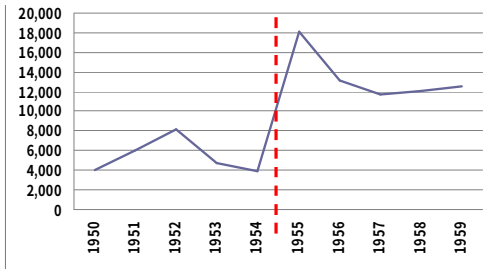
※「赤字」が新規都市へのフランチャイズ移転球団

NPB においては、1978 年以降移転した 6 チームのうち、実に 5 チームが新天地へとフランチャイズ本拠地を移転させている事が分かる。

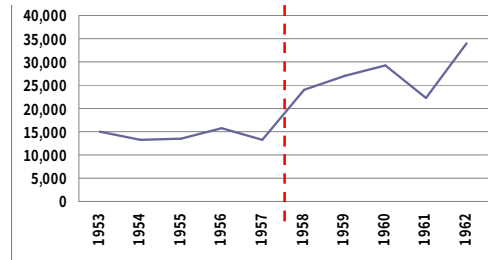
第1節 MLB および NPB におけるフランチャイズ移転効果

第1項 MLB におけるフランチャイズ移転前後の観客動員数推移

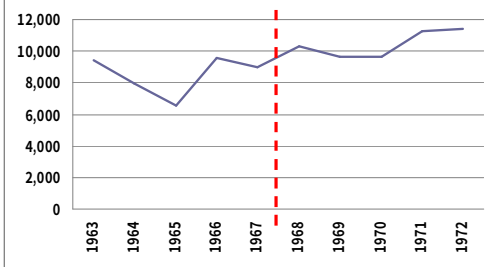
■アスレチックス フィラデルフィア→カンザスシティ



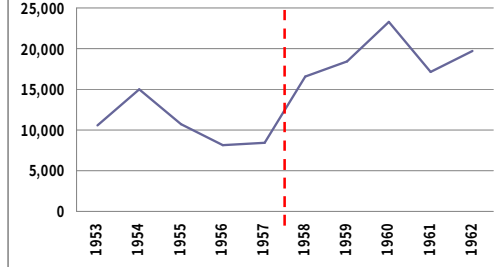
■ドジャース ニューヨーク→ロサンゼルス



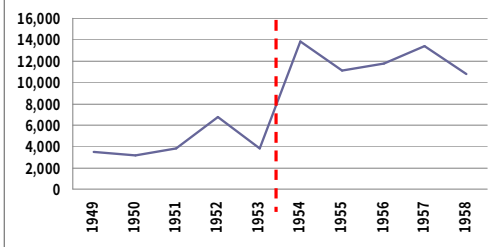
■アスレチックス カンザスシティ→オークランド



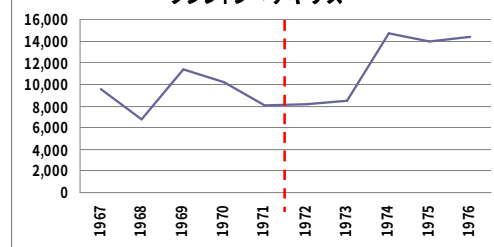
■ジャイアンツ ニューヨーク→サンフランシスコ



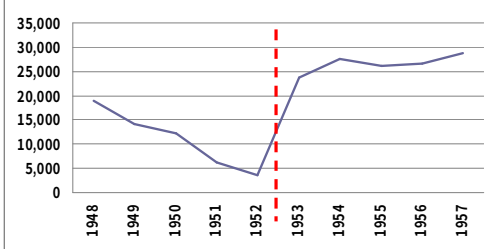
■オリオールズ セントルイス→ボルチモア



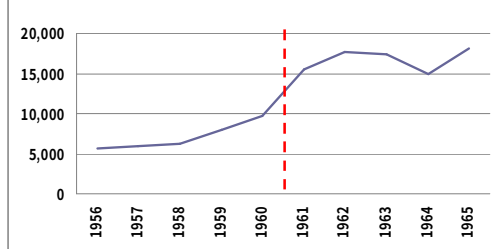
■レンジャーズ ワシントン→テキサス



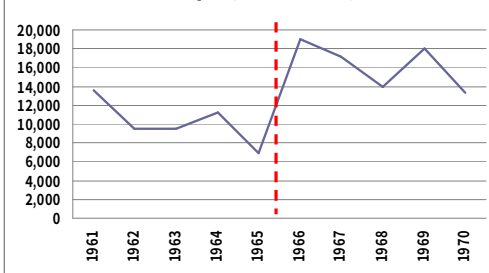
■ブレーブス ボストン→ミルウォーキー



■ツインズ ワシントン→ミネソタ



■ブレーブス ミルウォーキー→アトランタ



■エクスポズ モントリオール→ワシントン

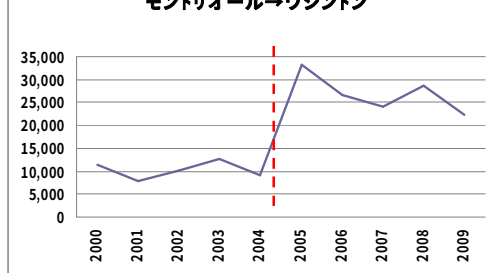


図 4 MLB における球団別フランチャイズ移転前後 5 年間の 1 試合観客動員数グラフ

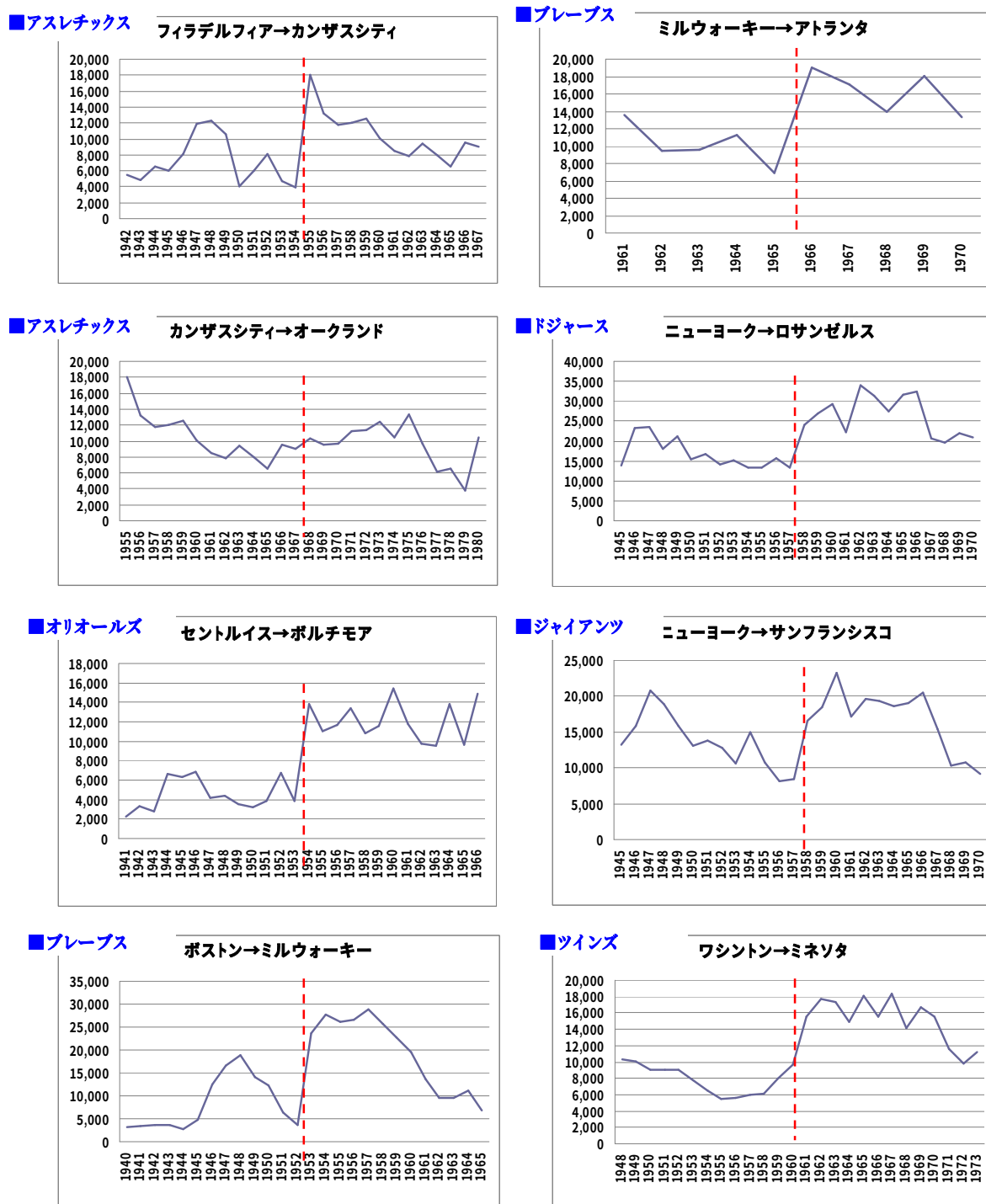


図 5 MLB における球団別フランチャイズ移転前後 13 年間の 1 試合観客動員数グラフ

第2項 NPB におけるフランチャイズ移転前後の観客動員数推移

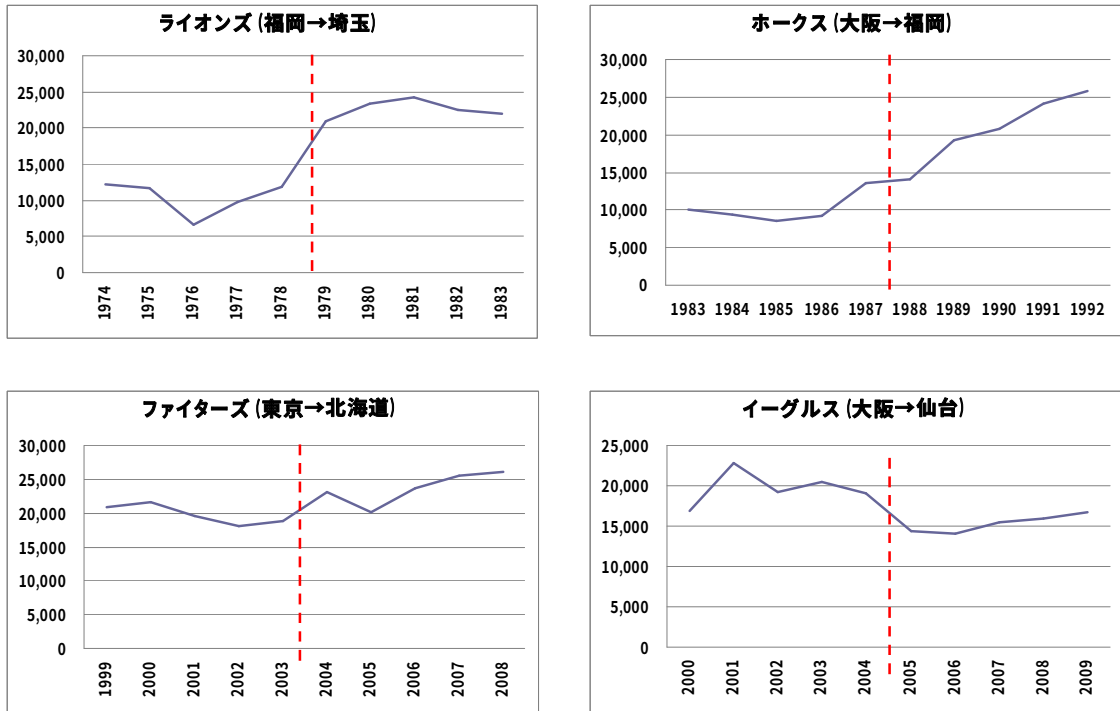


図 6 NPB における球団別フランチャイズ移転前後 5 年間の 1 試合観客動員数グラフ

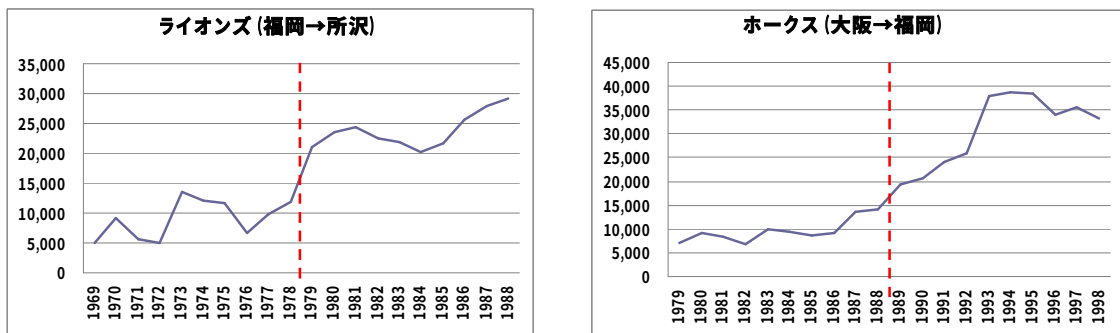


図 7 ライオンズ、ホークスに関するフランチャイズ移転前後 10 年間の 1 試合観客動員数グラフ

表 13 MLB および NPB のフランチャイズ移転前後の 1 試合あたり平均観客動員数一覧

球団名	移転先都市	移転前5年間の 平均観客動員数	移転後5年間の 平均観客動員数	移転前13年間の 平均観客動員数	移転後13年間の 平均観客動員数	移転前後5年間の 成長率	移転前後13年間の 成長率
ブレーブス	ボストン→ミルウォーキー	11,040	26,559	8,134	19,329	240.6%	237.6%
	ミルウォーキー→アトランタ	10,143	16,278	19,329	12,596	160.5%	65.2%
オリオールズ	セントルイス→ボルチモア	4,228	12,140	4,444	12,081	287.1%	271.9%
アスレチックス	フィラデルフィア→カンザス シティ	8,199	13,748	7,125	10,481	167.7%	147.1%
	カンザスシティ→オークランド	8,478	10,445	10,481	9,596	123.2%	91.6%
ドジャース	ブルックリン→ロサンゼルス	14,180	27,285	15,504	26,321	192.4%	169.8%
ジャイアンツ	ニューヨーク→サンフランシ スコ	10,581	19,029	13,664	16,790	179.8%	122.9%
ツインズ	ワシントン→テキサス	7,072	16,709	7,900	15,110	236.3%	191.3%
レンジャーズ	ワシントン→テキサス	9,174	11,940	—	—	130.2%	—
ナショナルズ	モントオール→ワシントン	10,261	27,023	—	—	263.4%	—

球団名	移転先都市	移転前5年間の 平均観客動員数	移転後5年間の 平均観客動員数	移転前10年間の 平均観客動員数	移転後10年間の 平均観客動員数	移転前後5年間の 成長率	移転前後10年間の 成長率
ホークス	大阪→福岡	10,975	25,566	9,649	30,775	232.9%	318.9%
ライオンズ	福岡→埼玉	10,410	22,637	9,042	25,181	217.4%	278.5%
ファイターズ	東京→札幌	19,803	23,647	—	—	119.4%	—
イーグルス	大阪→仙台	19,702	15,311	—	—	77.7%	—

【図－12】から【図－15】までの 4 つのグラフを上記の【表－13】にて、一覧にしたところ、20 世紀後半に MLB においてフランチャイズ移転を行った主な球団は全て、フランチャイズ移転前後 5 年間で、1 試合あたりの平均観客動員数を比較すると増加している事が分かる。

また、NPB における移転後 5 年間で唯一減少しているイーグルスも、移転前の近鉄バファローズの「京セラドーム」と比べ、イーグルス移転後の「K スタ宮城」の方が、集客可能数が圧倒的に少ない事を踏まえると、一概に減少したとは言えないので、今回は例外とした。

以上の結果より、20 世紀後半に MLB においてフランチャイズ移転を行った主な球団について、フランチャイズ移転前後 13 年間の 1 試合あたり平均観客動員数を比較すると、「ブレーブス」と「アスレチックス」が 2 度目のフランチャイズ都市移転後、減少している事が分かる。また、MLB のフランチャイズ移転の事例において、過去に 2 度フランチャイズ都市を移転させているのも前述の 2 球団である事から、短期間にフランチャイズ都市の移転を繰り返すと、観客動員数が伸び悩む可能性が高まると推測される。

第3項 MLB および NPB における移転前後の勝率

表 14 移転前後の勝率変化

球団名	移転先都市	移転前5年間の 平均勝率	移転後5年間の 平均勝率	移転前10年間の 平均平均勝率	移転後10年間の 平均平均勝率	移転前後5年間の 成長率	移転前後10年間の 成長率
ブレーブス	ボストン→ミルウォーキー	0.507	0.588	0.493	0.573	116.1%	116.3%
	ミルウォーキー→アトランタ	0.533	0.509	0.560	0.494	95.5%	88.2%
オリオールズ	セントルイス→ボルチモア	0.365	0.431	0.414	0.480	117.9%	116.1%
アスレチックス	フィラデルフィア→カンザス シティ	0.404	0.402	0.426	0.404	99.4%	94.8%
	カンザスシティ→オークランド	0.403	0.565	0.412	0.550	140.2%	133.5%
ドジャース	ブルックリン→ロサンゼルス	0.614	0.551	0.607	0.549	89.7%	90.6%
ジャイアンツ	ニューヨーク→サンフランシ スコ	0.497	0.549	0.525	0.557	110.5%	106.2%
ツインズ	ワシントン→テキサス	0.404	0.537	0.420	0.549	132.9%	130.6%
レンジャーズ	ワシントン→テキサス	0.447	0.437	0.422	0.489	97.8%	115.9%
ナショナルズ	モントオール→ワシントン	0.454	0.424	—	—	93.3%	—

球団名	移転先都市	移転前5年間の 平均勝率	移転後5年間の 平均勝率	移転前10年間の 平均平均勝率	移転後10年間の 平均平均勝率	移転前後5年間の 成長率	移転前後10年間の 成長率
ホークス	大阪→福岡	0.429	0.406	0.422	0.438	94.6%	103.9%
ライオンズ	福岡→埼玉	0.519	0.433	0.409	0.552	83.4%	135.1%
ファイターズ	東京→札幌	0.451	0.531	—	—	117.8%	—
イーグルス	大阪→仙台	0.506	0.420	—	—	83.0%	—

レンジャーズを除く、MLB におけるフランチャイズ移転を行なったいずれの球団も、移転前後 5 年間と 10 年間で勝率が逆転していない事が分った。また、NPB においては、分析対象データがとれているホークスとライオンズのいずれもが、移転前後 5 年間の勝率を移転前後 10 年間の勝率が上回っている事が明らかとなった。

第2節 MLB および NPB における移転成功球団の抽出

表 15 フランチャイズ移転球団に関する移転前後の「観客動員数」と「勝率」の成長率

球団名	移転先都市	移転前後5年間の観客動員数の成長率	移転前後13年間の観客動員数の成長率	移転前後5年間の勝率の成長率	移転前後10年間の勝率の成長率
ブレーブス	ボストン→ミルウォーキー	240.6%	237.6%	116.1%	116.3%
	ミルウォーキー→アトランタ	160.5%	65.2%	95.5%	88.2%
オリオールズ	セントルイス→ボルチモア	287.1%	271.9%	117.9%	116.1%
アスレチックス	フィラデルフィア→カンザスシティ	167.7%	147.1%	99.4%	94.8%
	カンザスシティ→オークランド	123.2%	91.6%	140.2%	133.5%
ドジャース	ブルックリン→ロサンゼルス	192.4%	169.8%	89.7%	90.6%
ジャイアンツ	ニューヨーク→サンフランシスコ	179.8%	122.9%	110.5%	106.2%
ツインズ	ワシントン→テキサス	236.3%	191.3%	132.9%	130.6%
レンジャーズ	ワシントン→テキサス	130.2%	—	97.8%	115.9%
ナショナルズ	モントオール→ワシントン	263.4%	—	93.3%	—

球団名	移転先都市	移転前後5年間の観客動員数の成長率	移転前後13年間の観客動員数の成長率	移転前後5年間の勝率の成長率	移転前後10年間の勝率の成長率
ホークス	大阪→福岡	232.9%	318.9%	94.6%	103.9%
ライオンズ	福岡→埼玉	217.4%	278.5%	83.4%	135.1%
ファイターズ	東京→札幌	119.4%	—	117.8%	—
イーグルス	大阪→仙台	77.7%	—	83.0%	—

まず、本稿においては、移転後の観客動員数の成長率、および勝率の成長率という2項目より、その数値のいずれもが他の移転球団よりも高い球団を「移転成功球団」として定義する。MLB では、「ブレーブス」、「アスレチックス」、「ジャイアンツ」、「ツインズ」の4チームを「成功球団」とし、NPB では「ホークス」と「ライオンズ」を「成功球団」とする。次に、それらの成功球団に共通する項目を導き出す。

第1項 移転成功球団時のメジャー4大スポーツのフランチャイズ都市調査

※「赤字」は本稿における成功球団を表している。

表 16 MLB フランチャイズ都市移転時のメジャー4大スポーツに関するフランチャイズ本拠地一覧

チーム	年度	移転先都市名	NFL	NHL	NBA
ブレーブス	1953	ミルウォーキー	グリーンベイ・パッカーズ	—	ミルウォーキー・ホークス(現アトランタ・ホークス)
オリオールズ	1954	ボルチモア	ボルチモア・コロツ(現インディアナ・コロツ)	—	ボルチモア・ブレツ(現存せず)
アスレチックス	1955	カンザスシティ	—	—	—
ドジャース	1958	ロサンゼルス	ロサンゼルス・ラムズ(現セントルイス・ラムズ)	—	—
ジャイアンツ	1958	サンフランシスコ	サンフランシスコ・フォーティナイナーズ	—	—
ツインズ	1961	ミネソタ	ミネソタ・バイキングス ※	—	—
ブレーブス	1966	アトランタ	アトランタ・ファルコンズ ※	—	—
アスレチックス	1968	オークランド	オークランド・レイダース	オークランド・シールズ(現存せず)	—
レンジャーズ	1972	テキサス	ダラス・カウボーイズ	—	ダラス・チャバラズ(現サンアントニオ・スパーズ)
ナショナルズ	2005	ワシントン	ワシントン・レッドスキンス	ワシントン・キャピタルズ	ワシントン・ウィザーズ

※MLB球団と同年に移転

※NHL は 1942 年からオリジナル・シックスと呼ばれる 6 チームで構成されていたが、1967 年エキスパクション（新規チームの加入）が行われ、新たに 6 チームが追加され 12 球団となった。その後、1972 年以降は、毎年のように新チームが追加され、現在では 30 チームから成り立っている。

※NBA は 1961 年に新規チームが追加され、1967 年以降は、それまでは 8 チームであったチーム数が次々に増加した結果、現在では 30 球団から成り立っている。

MLB 球団の移転先都市について、NBA および NHL のフランチャイズチームが在る事の因果関係は無いように読み取れる。

第2項 MLB フランチャイズ都市移転時の優遇措置

表 17 MLB フランチャイズ都市移転時の主な優遇措置事例一覧

チーム	移転年度	移転先都市名	優遇措置
ブレーブス	1953	ミルウォーキー	・公的資金投入によるスタジアムの建設。 ・ガスやドライクリーニング等の無償提供。 ・不動産、自動車、各種器具の大幅割引等の支援。
オリオールズ	1954	ボルチモア	—
アスレックス	1955	カンザスシティ	—
ドジャース	1957	ロサンゼルス	・ロサンゼルス市が約300エーカーの土地を提供。 ・周辺道路の整備に274万ドル、その他インフラ整備を合わせると約500万ドルを市が投資。
ジャイアンツ	1957	サンフランシスコ	・市が40,000人収容スタジアム建設の為に1500万ドルを投資。 ・12,000人分(約3,000台)の駐車場建設。
ツインズ	1961	ミネアポリス	—
ブレーブス	1966	アトランタ	・MLBとアトランタの間で、1966年までに市がスタジアム建設を行えば、市にMLB球団を移転させることを約束。1964年の市議会でのこの契約が発表されると、満場一致で1,920万ドルのスタジアム建設が決定。
アスレックス	1968	オークランド	—
レンジャース	1972	テキサス	—
ナショナルズ	2005	ワシントン	・市がスタジアム建設費として6億1000万ドルを投じた。

※「赤字」は本稿における成功球団を表している。

本稿の調査で確認できた、フランチャイズ移転時に優遇措置を受ける事ができている球団は、全8球団のうち5球団となった。また、NPBにおいてフランチャイズ移転時の優遇措置は、ほぼ無いに等しい事が分った。

本稿における移転成功球団と、フランチャイズ移転に伴う州や市からの優遇措置制度の有無については、因果関係が無いように思われる。

第3項 球団移転時の背景とオーナーの意思決定

表 18 MLB および NPB におけるフランチャイズ移転の背景

(同: 移前後でオーナーが同じ、異: 移転前後でオーナーが交代)

チーム	年度	オーナー	移転元都市名	移転の背景
ブレーブス	1953	同 (ルー・ペリーニ)	ミルウォーキー	・当時同じくボストンを本拠地とするレッドソックスとの人気に差が生じた結果、観客動員数は落し経営難となっていたミルウォーキー(都市)については、特定球団の色が少なく、地元ファンも新しいMLB球団の受け入れを熱望した事を受け、低迷状態打開の為、オーナーは自らのホームグラウンドを売却し、ミルウォーキーに移転した。
オリオールズ	1954	異 (ビル・ベック)	ボルチモア	・ベックは、大リーグ球団も利益を追求する企業であると断言し、その言葉どおり自ら様々な奇策を凝らして観客動員に務めた。
アスレチックス	1955	同 (アーノルド・ジョンソン)	カンザスシティ	・ジョンソンはカンザスシティの支援を受け、球団をつくるためのターゲットをアスレチックスに絞り込み、ヤンキースタジアムを売却すると、次はカンザスシティに要請し、ブルースタジアムをMLB水準の球場に改修させた。
ドジャース	1958	同 (ウォルター・オマリー)	ロサンゼルス	・主な理由は以下の4つがあげられる 「スタジアムの老朽化」、「移動手段(ジェット機)の発達」、「カリフォルニア州の発展・成長」、「市の支援体制が充実」 ・移転前、地元ニューヨークで良好な球団経営状況であったにも関わらず移転を実行した背景には、西海岸発展の将来性を見込み、球団経営のさらなる発展を目的とした、
ジャイアンツ	1958	同 (ホーレス・C・ストーンハム)	サンフランシスコ	・ブレーブスのミルウォーキー移転における成功を受け、ミネソタ州に移転することを検討していたが、ドジャースのオーナーであるオマリーからの誘いを受け、当時急速な発展を遂げていた西海岸を拠点に更なる球団経営の発展を目指し、サンフランシスコへ移転する事に最終決定した。
ツインズ	1961	同 (ケビン・グリフィス)	ミネソタ	・1955年に父親の後を継ぐ形で、息子のケビン・グリフィスがオーナーに就任し、長年に渡る観客減に悩んでいたチームの経営改革案、および移転計画を立て、本拠地グリフィススタジアムを市に売却し、その資金をもとに1961年ミネソタへ移転した。
ブレーブス	1966	同 (ウィリアム・パーソロメイ)	アトランタ	・アトランタの新興都市としての可能性、移転することによるテレビ契約、近年建設された52,000人収容のフルトン・カウンティスタジアムなど、アトランタに多くの魅力があった為移転を行なった。
アスレチックス	1968	同 (チャールズ・O・フィンリー)	オークランド	・オーナー自ら積極的に球団に投資し、極的な球団経営を行う。様々なアイデアと行動力で球界に新風を吹かせたオーナーであった。
レンジャーズ	1972	同 (ボブ・ショート)	テキサス	・前身であるワシントン・セネターズを1968年に買収した後、積極的な経営改革を行ったが、1968年以降は成績も振るわず、観客動員数も減少した為、アメリカン・リーグに移転を願い、1972年にテキサスのアーリントンに移転した。
ナショナルズ	2005	異 (経営破綻→MLB管轄)	ワシントン	・1990年代後半に深刻な経営難となり、1998から5年連続で観客動員数が100万人に届かないという状況となった。そして、2002年それまで売却先が見つからなかったが、当時のオーナーがMLB機構に対して1億2000万ドルで球団を売却した。

(同:移前後でオーナーが同じ、異:移転前後でオーナーが交代)

チーム	年度	オーナー	移転先都市名	移転理由(背景) / オーナーの関わり方
ホークス	1979	異 南海電鉄(吉村茂夫氏) → ダイエー(中内功氏)	福岡	・選手の年俸が上がる一方で、極度の資金難に陥っており、球団経営は悪化しており赤字続きであったが、一方で電鉄本社が設備投資に資金がかさみ、球団に資金が回せなかった。 ・泉州沖の「関西空港」建設が決定、難波周辺の再開発が本格的に検討され始めていた。大阪球団も移転、解体を迫られていた。
ライオンズ	1989	異 福岡野球株式会社 → 国土計画(堤義明氏)	埼玉	・1969～1970年にかけてプロ野球界で起きた黒い霧事件の影響で、1978年には負債が10億円にまで膨らみ、球団の経営破綻直前という状況にまで陥った。 ・球団経営は太平洋クラブの経営悪化によりスポンサー料の納入が滞り、最初から危機に立たされていたが、福岡市に平和台球場の使用料を値上げされ、球団の経営はさらに悪化した為、移転に踏み切った。
ファイターズ	2004	同 日本ハム(大社啓治氏)	札幌	・観客動員は1994年に200万人を割り、2001年のシーズンは147万人にまで落ち込んだ。成績も下位に沈むシーズンの方が圧倒的に多く、観客動員数の落ち込みと成績の低迷、この二つがファイターズの札幌への移転の大きな要因となった。
イーグルス	2005	異 近畿日本鉄道 → 楽天株式会社(三木谷浩史)	仙台	・2004年大阪近鉄バファローズとオリックス・ブルーウェーブの球団合併に伴い、楽天イーグルスが新球団としてパリーグへ参入した。(実質的な近鉄バファローズの経営破たんとも言える)

MLB と NPB におけるフランチャイズ移転の背景に関する比較、分析を通して、MLB における球団移転の目的が、新規ファン獲得といったポジティブな理由であるのに対し、NPB のライオンズおよびホークスの両球団とも移転背景としては、球団経営が立ち行かなくなった事が原因と考えられる。また、本稿でフランチャイズ移転の成功事例を定義した球団について、フランチャイズ移転時の背景とオーナーの関わり合い方を分析した結果、MLB ではないずれの球団もオーナーが新天地へのフランチャイズ移転による売上拡大を求め、積極的にフランチャイズ移転を行った経緯がある事が明らかとなった。一方、NPB における成功事例と定義したホークスとライオンズの事例を見てみると、フランチャイズ移転の理由は実質的な経営破綻であり、球団の売却とあわせてオーナーの交代が行なわれている。

第4項 MLB および NPB におけるフランチャイズ移転後の1試合平均観客動員数推移

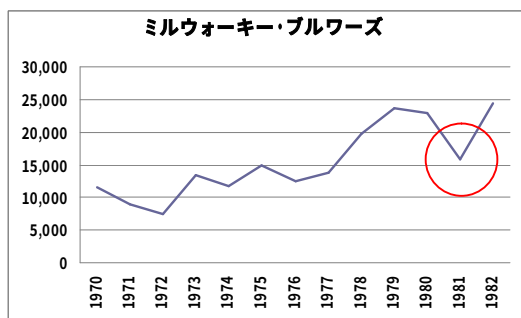
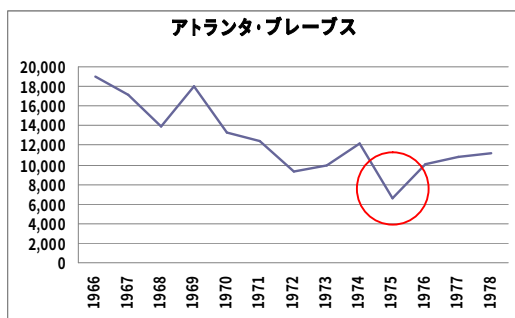
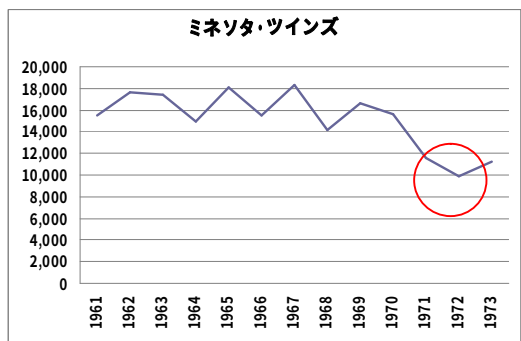
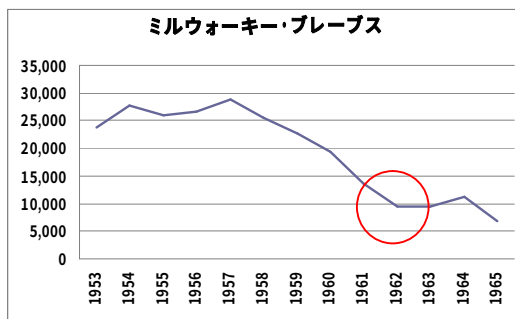
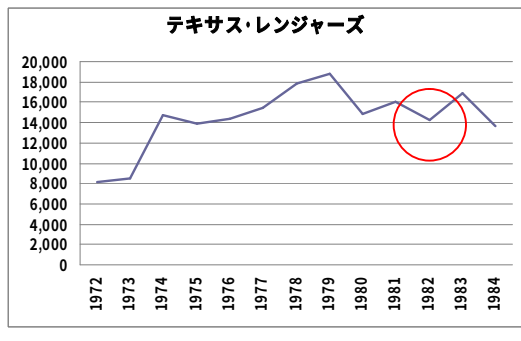
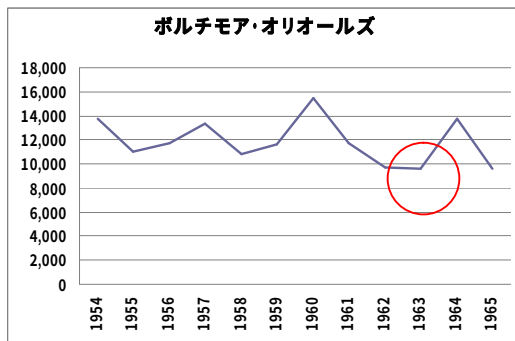
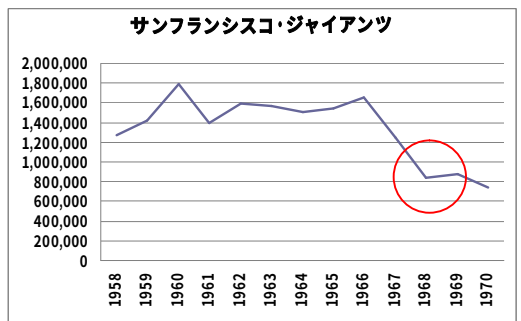
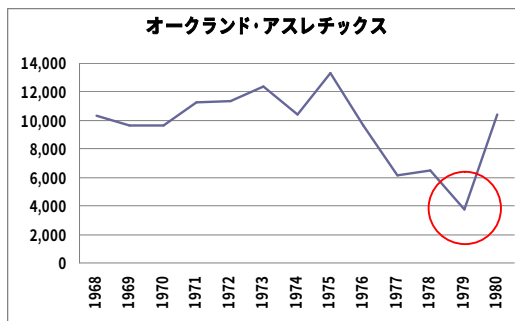
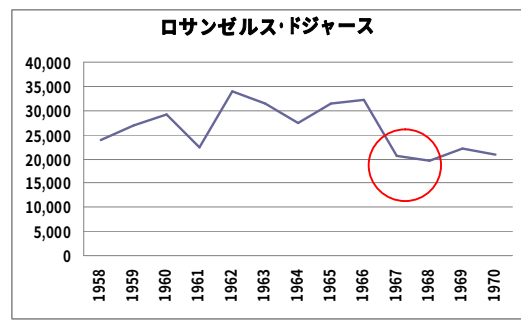
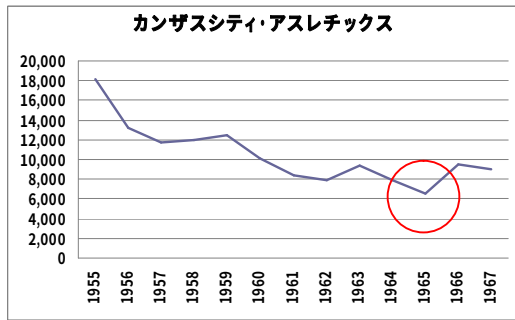


図 8 MLB フランチャイズ移転後 13 年間の 1 試合平均観客動員数比較グラフ

MLB のフランチャイズ移転後の観客動員数を分析する事で、移転を行った球団は、いずれも移転後 10 年目から 12 年目に観客動員数が急激に落ち込む時期が来ることが明らかとなった。特にレンジャーズとブルーワーズを除く事例を見ると、移転後に最も観客動員数が落ち込む事が判明した。

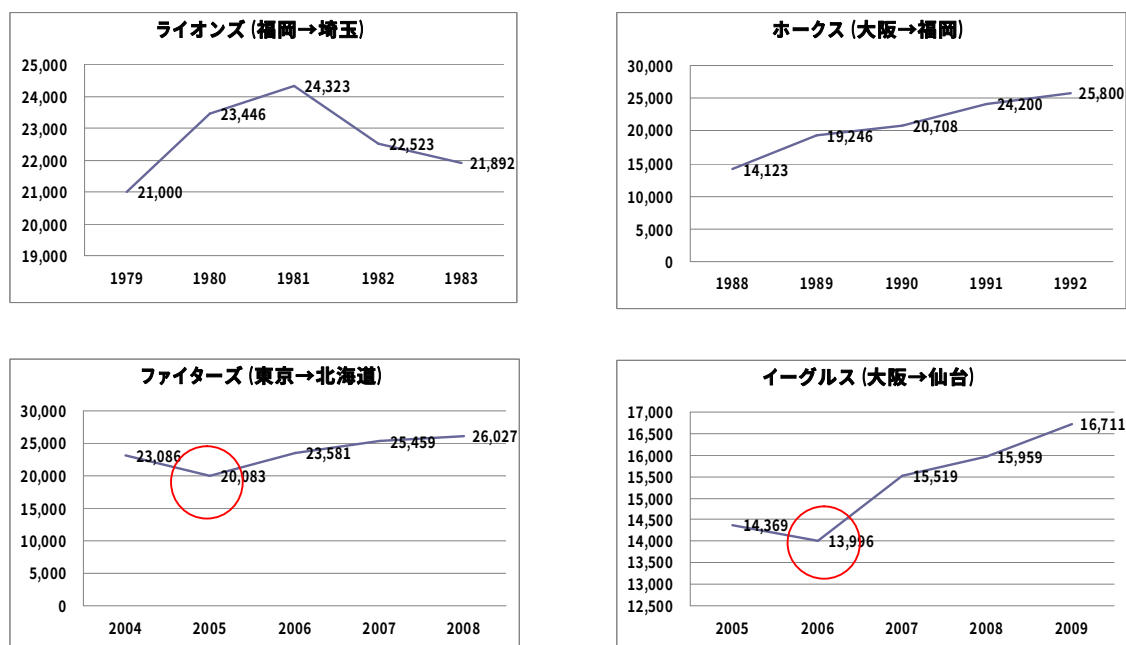


図 9 NPB フランチャイズ移転後 5 年間の 1 試合平均観客動員数比較グラフ

NPB における近年のフランチャイズ移転事例を調査した結果、2004 年以降にフランチャイズを移転しているファイターズとイーグルスの事例からも分かるとおり、いずれも移転後 2 年目は観客動員数が一時的に減少するが、3 年目以降緩やかに観客動員数を増加させている事が分かる。

また、1990 年以前に移転を行なった、ライオンズとホークスについては、移転後 2 年目でも観客動員数は落ち込んでいない。

第5章 考察

本章では、本研究結果から得られた知見を整理し、プロ野球界が発展していく為の NPB における効果的なフランチャイズ移転の有り方について考察していく。

第1節 移転候補地域におけるファン人口予測

本節では、不振球団におけるフランチャイズ移転時の判断材料として、推計ファン人口や推計観客動員数を導き出す。

これまで見て来たとおり、移転候補球団は「スワローズ」と「バファローズ」とし、現在スワローズは東京を本拠地としており、バファローズは大阪を本拠地としている事から、スワローズは「ファイターズ」、バファローズは「イーグルス」および「南海ホークス」の事例を比較対象として、ファン人口の算出を行なった。

第1項 推計ファン人口の計算式

転後の推計ファン人口については、2004 年にフランチャイズを東京から北海道へ移転させた「ファイターズ」、および 2005 年に新規参入ながら実質的には「近鉄バファローズ」の大阪から宮城県へのフランチャイズ移転とともとれる「イーグルス」について、1999 年と 2009 年のファン人口の増減率を分析し、それらの結果をバファローズとスワローズが移転すると仮定した場合にあてはめる事で、移転候補地域における 10 年後の推計ファン人口を算出する。

以下に移転後の「推計ファン人口」算出方法を記す。

まず、NPB において移転経験のある「ファイターズ」と「イーグルス」の 2 球団をとりあげ、それぞれ移転前後である 1999 年と 2009 年の「ファン人口／本拠地地域の人口」の値を算出する。次に、移転経験のある 2 球団の「ファン人口の成長率」を以下の式より導き出す。

「ファン人口の成長率」＝

$$\{(2009 \text{ 年のファン人口} / \text{本拠地地域の人口}) \div (1999 \text{ 年のファン人口} / \text{本拠地地域の人口})\} \times 100$$

続いて、上記の「ファン人口の成長率」を用いて、不振球団が移転候補地域へ移転した際の「推計ファン人口」を導く。推計ファン人口を「X」と置くと、式は以下のようになる。

「ファン人口の成長率」＝

$$\{(X/\text{移転候補先の地域人口}) \div (\text{不振球団の 2009 年のファン人口} / \text{不振球団の本拠地地域の人口})\} \times 100$$

※本研究では、「移転候補地域の人口」は、2009 年度の値を用いた。

以上の分析より「X」を算出し、移転後の「推計ファン人口」を導き出す。

続いて、上記公式を用いて、バッファローズおよびスワローズが移転候補地域へフランチャイズを移転させた場合の推計ファン人口を算出する。

第2項 ファン人口予測数値

バッファローズは大阪を本拠地としていることから、「イーグルス」および「南海ホークス」の事例を比較対象として、推計ファン人口の算出を行なった。

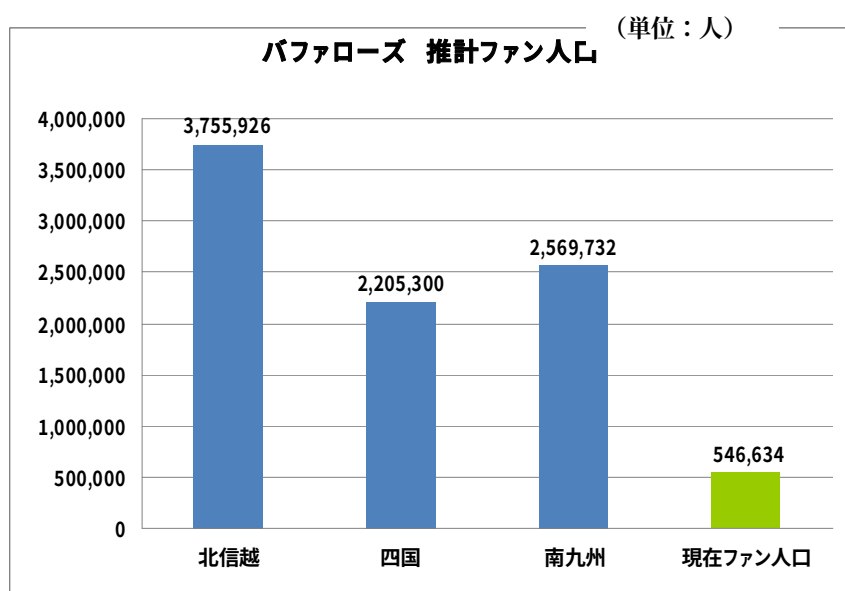


図 10 バッファローズに関するフランチャイズ移転後の推計ファン人口

上記グラフにある、オリックスの移転先地域での推計ファン人口は、以下のように算出した。

・ イーグルスの事例より、

① $\{(2009 \text{ 年のファン人口} : 2,518,899 \text{ 人} / \text{本拠地人口} : 6,940,802 \text{ 人}) \div (1999 \text{ 年のファン人口} : 360,415 \text{ 人} / \text{本拠地地域の人口} : 18,429,619 \text{ 人})\} \times 100 = \text{ファン人口の成長率} : 1855.72$

② $\{(X / \text{移転候補先の地域人口} : 3 \text{ 地域の人口}) \div (\text{オリックスの 2009 年のファン人口} :$

546,634 人／オリックスの本拠地地域の人口：18,470,434 人)} ×100 = ファン人口の成長率：1855.72

$X = (\text{北信越}) 3,755,926、(\text{四国}) 2,205,300、(\text{南九州}) 2,569,732$

その結果、オリックスがフランチャイズを移転した場合、北信越地方で現在の約 7 倍、四国で約 4 倍、南九州で約 4.7 倍のファン人口が見込まれる事が分った。

続いて、現在スワローズは東京を本拠地としていることから、スワローズは「ファイターズ」を比較対象として、推計ファン人口の算出を行なった。

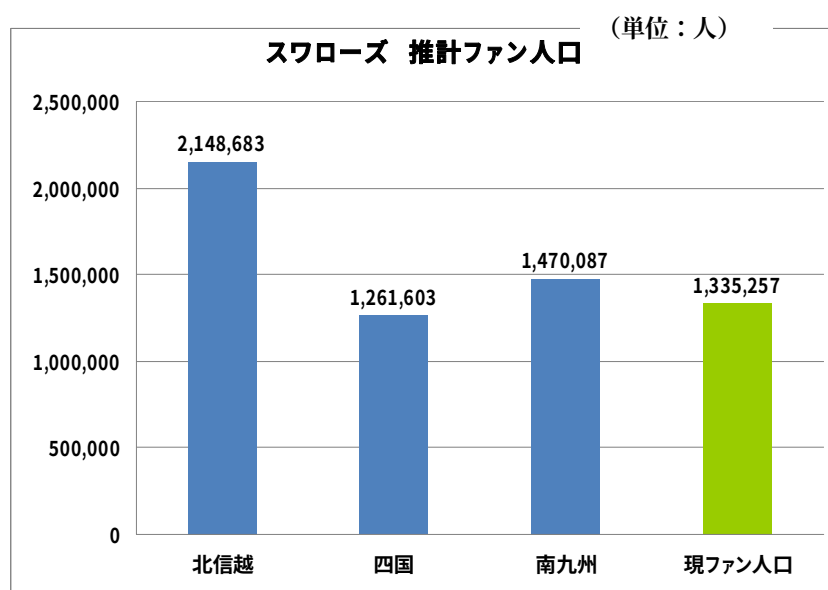


図 11 スワローズに関するフランチャイズ移転後の推計ファン人口

上記グラフにある、ヤクルトの移転先地域での推計ファン人口は以下のように算出した。

・ ファイターズの事例より、

①{(2009 年のファン人口：2,959,068 人／本拠地人口：5,542,740 人) ÷ (1999 年のファン人口：214,450 人／本拠地地域の人口：33,214,503 人)} ×100 = ファン人口の成長率：8268.61

②{(X／移転候補先の地域人口：3 地域の人口) ÷ (ヤクルトの 2009 年のファン人口：214,450 人／ヤクルトの本拠地地域の人口：33,214,503 人)} ×100 = ファン人口の成長率：8268.61

$X = (\text{北信越}) 21,486,828、(\text{四国}) 12,616,034、(\text{南九州}) 14,700,869$

その結果、オリックスがフランチャイズを移転した場合、北信越地方で現在の約 16 倍、四国で約 9.4 倍、南九州で約 11 倍のファン人口が見込まれると考えられる。

しかしながら、ヤクルトの事例を見ると、移転候補地域 3 箇所における予想ファン人口が、いずれも 1 千万人を超える数値となり、現実的な数値と乖離しているように思われる。原因は、分析を行なうにあたっての比較対象であった「ファイターズ」の関東地域におけるファン人口が 21 万 5 千人と非常に少なかった為、北海道移転後の人口に対するファン人口の割合と比較した結果、スワローズの数値が大幅に増加した。

そこで、1999 年のスワローズファン人口と比較し、1999 年の関東地域における日本ハムファイターズのファン人口を 10 倍の 215 万人と想定すると、北信越で 2,148,682 人 (1.6 倍)、四国で 1,261,603 (0.94 倍)、南九州で 1,470,086 (1.1 倍)となり、非常に現実的な数値となることから、本稿におけるスワローズのフランチャイズ移転先地域でのファン人口獲得数値のみ、例外として算出された値の 10%を想定数値とする。

第 2 節 移転後の観客動員数予測

第 1 項 観客動員数予測の計算式

移転後の観客動員数増減見込みについては、NPB における移転経験がある、「ファイターズ」、「ホークス」、「ライオンズ」および「イーグルス」の事例より、移転前後 5 年間の観客動員数推移を分析し、その結果を不振球団のフランチャイズ移転ケースにあてはめ、移転候補地における移転後 5 年間の 1 試合平均観客動員数を算出する。

- ・以下に移転後の「推計観客動員数」算出方法を記す。

まず、NPB において移転経験がある球団に関して、移転前 5 年間と移転後 5 年間に分けて、「地域別観客動員率」を以下の式より算出する。

$$\text{「地域別観客動員率」} = \{ (5 \text{ 年間の平均観客動員数}) \div (\text{フランチャイズ地域の平均人口}) \} \times 100$$

次に、上記「地域別観客動員率」を用いて、移転球団の「観客動員数の成長率」を以下の式より算出する。

「観客動員数の成長率」＝

$$\{(\text{移転後5年間の地域別観客動員率}) \div (\text{移転前5年間の地域別観客動員率})\} \times 100$$

続いて、上記「観客動員数の成長率」を用いて、不振球団が移転候補地域へ移転した際の「推計観客動員数」を算出する。移転後の推計観客動員数を「X」とすると、式は以下のようになる。

「観客動員数の成長率」＝

$$\{(X / \text{移転候補地域の平均人口}) \div (\text{不振球団の2005～2009年の平均観客動員数} / \text{不振球団のフランチャイズ地域における2005～2009年の平均人口})\} \times 100$$

上記より「X」を算出し、移転後の「推計観客動員数」を導き出す。

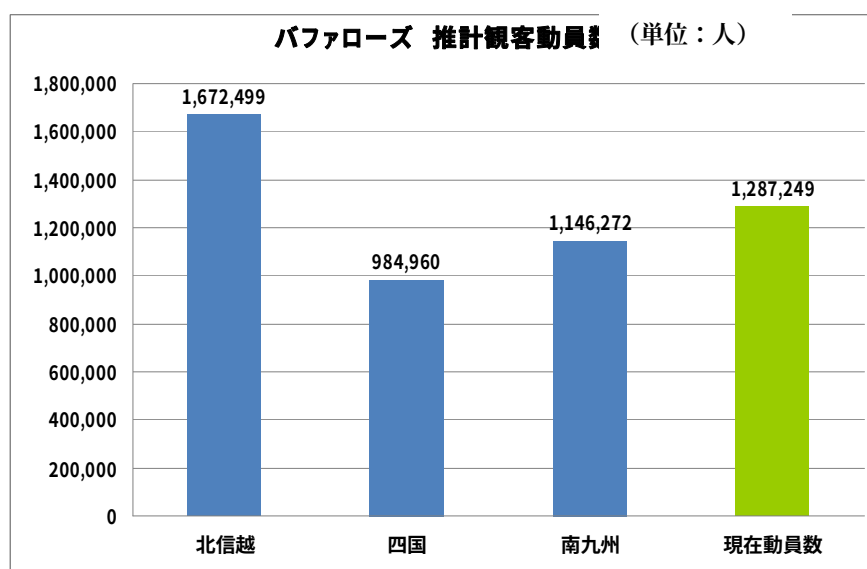


図 12 バッファローズに関するフランチャイズ移転後の推計観客動員数

上記グラフにある、オリックスの移転先地域での推計観客動員数は以下のように算出した。

・ ホークスの事例より

$$\textcircled{1} \text{「移転前5年の地域別観客動員率：3.98」} = \{(5 \text{年間分の観客動員数平均値：} 713,400) \div (\text{本拠地地域の平均地域人口：} 17,908,527)\} \times 100$$

「移転後 5 年の地域別観客動員率：19.5」＝ $\{(5 \text{ 年間分の観客動員数平均値：1,661,800}) \div (\text{本拠地地域の平均地域人口：8,508,708})\} \times 100$

②「観客動員数の成長率：490.27」＝ $\{(\text{移転後 5 年間の地域別観客動員率：19.53}) \div (\text{移転前 5 年間の地域別観客動員率：3.98})\} \times 100$

・ イーグルスの事例より

③「移転前 5 年の地域別観客動員率：7.42」＝ $\{(5 \text{ 年間分の観客動員数平均値：1,372,400}) \div (\text{本拠地地域の平均地域人口：18,480,625})\} \times 100$

「移転後 5 年の地域別観客動員率：15.45」＝ $\{(5 \text{ 年間分の観客動員数平均値：1,079,685}) \div (\text{本拠地地域の平均地域人口：6,983,903})\} \times 100$

④「観客動員数の成長率：208.17」＝ $\{(\text{移転後 5 年間の地域別観客動員率：19.53}) \div (\text{移転前 5 年間の地域別観客動員率：3.98})\} \times 100$

・ ホークスおよびイーグルスの結果より

⑤「観客動員数の成長率：349.22」＝ $\{(X / \text{移転候補先の平均地域人口：3 の平均人口}) \div (\text{オリックスの 2005～2009 年の平均観客動員数：1,287,249} / \text{オリックスの本拠地の 2005～2009 年の平均地域人口：18,456,182})\} \times 100$

$X =$ (北信越) 1,672,499、(四国) 984,960、(南九州) 1,146,272、

その結果、オリックスがフランチャイズを移転した場合、北信越地方で現在の約 1.3 倍、四国で約 0.8 倍、南九州で約 0.9 倍の観客動員数が見込まれる事が分った。

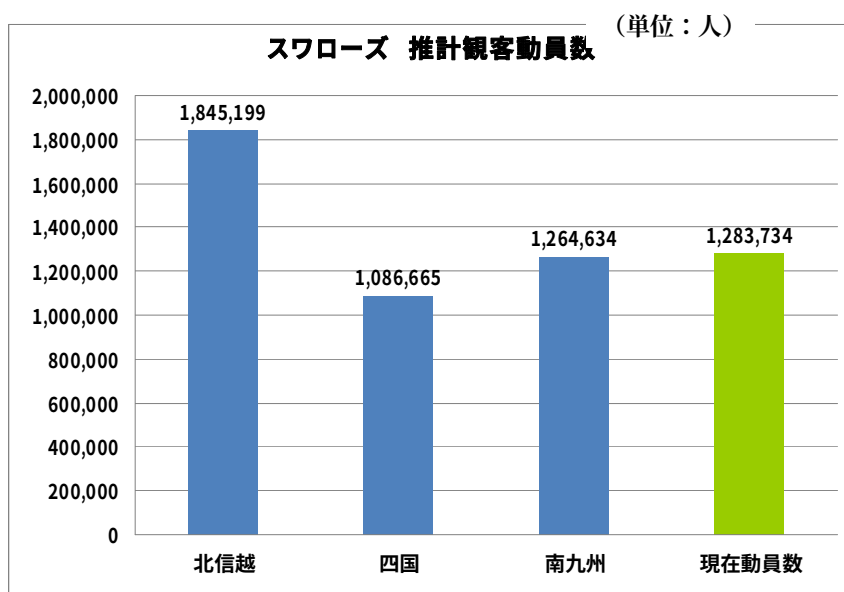


図 13 スワローズに関するフランチャイズ移転後の推計観客動員数

上記グラフにある、ヤクルトの移転先地域での推計観客動員数は以下のように算出した。

・ ファイターズの事例より

①「移転前5年の地域別観客動員率：4.06」＝ $\{(5 \text{ 年間分の観客動員数平均値：} 1,369,200) \div (\text{本拠地地域の平均地域人口：} 33,674,413)\} \times 100$

「移転後5年の地域別観客動員率：29.63」＝ $\{(5 \text{ 年間分の観客動員数平均値：} 1,658,434) \div (\text{本拠地地域の平均地域人口：} 5,596,854)\} \times 100$

②「観客動員数の成長率：728.76」＝ $\{(\text{移転後5年間の地域別観客動員率：} 29.63) \div (\text{移転前5年間の地域別観客動員率：} 4.06)\} \times 100$

観客動員数の成長率：728.76」＝ $\{(X / \text{移転候補先の平均地域人口：} 3 \text{ 地域の人口}) \div (\text{ヤクルトの} 2005 \sim 2009 \text{ 年の平均観客動員数：} 1,283,734 / \text{移転候補球団の本拠地の} 2005 \sim 2009 \text{ 年の平均地域人口：} 34,814,146)\} \times 100$

$X = \text{（北信越）} 1,845,199、\text{（四国）} 1,086,665、\text{（南九州）} 1,264,634$

その結果、オリックスがフランチャイズを移転した場合、北信越地方で現在の約 1.4 倍、四国で約 0.8 倍、南九州で約 1.0 倍の観客動員数が見込まれる事が分った。

・ 計算式の考え方について

今回の算出式では、「バファローズ」が大阪からフランチャイズ都市を移転させると想定している事から、比較対象をいずれもフランチャイズ移転前に大阪を本拠地としていた「南海ホークス」と「近鉄バファローズ（イーグルス移転前）」の2球団とし、フランチャイズ地域を「大阪」、「兵庫」、「奈良」、「京都」の4都道府県とした。同様に、「スワローズ」が東京からフランチャイズ都市を移転させると想定している事から、比較対象を移転前に東京を本拠地としていた「日本ハムファイターズ」とし、フランチャイズ地域を「東京」、「埼玉」、「神奈川」、「千葉」の4都道府県とした。

「南海ホークス」の移転先フランチャイズ地域は「福岡」、「佐賀」、「長崎」、「大分」の4都道府県、「イーグルス」は「宮城」、「岩手」、「山形」、「福島」、最後に「ファイターズ」については、東北地区と移動距離があり、かつ、東北地方はイーグルスのフランチャイズ地域とも取れることから、北海道地区のみを本拠地地域として分析を行なった。

移転先地域の「北信越地域」は、「新潟県」「富山県」「石川県」「長野県」の4都道府県とし、「四国地域」は、「徳島県」「香川県」「愛媛県」「高知県」の4都道府県とした。そして、「南九州地域」については、「熊本県」「宮崎県」「鹿児島県」の3都道府県を移転先本拠地地域として分析を行なった。

また、2010年以降の移転先都道府県人口については、2009年度の人口とほぼ同数と想定し、

分析を行なった。

第3節 移転先候補地の特定と優先順位付け

第1項 移転候補地域の特定と順位付けの方法

移転後の推計ファン人口と推計観客動員数から、仮にフランチャイズを移転するとした際、ファン人口および観客動員数の増加見込みより、移転候補地域の順位付けを行う。

・バファローズ

表 19 スワローズに関するフランチャイズ移転後の観客動員数予想数値

	北信越	四国	南九州	
観客動員数見込み	1,672,499	984,960	1,146,272	(人)
観客動員数増減率	129.9%	76.5%	89.0%	(%)
ファン人口見込み	3,755,926	2,205,300	2,569,732	(人)
ファン人口増減率	687%	403%	470%	(%)

・スワローズ

	北信越	四国	南九州	
観客動員数見込み	1,845,199	1,086,665	1,264,634	(人)
観客動員数増減率	143.7%	84.6%	98.5%	(%)
ファン人口見込み	2,148,682	1,261,603	1,470,086	(人)
ファン人口増減率	161%	94%	110%	(%)

以上の分析結果より、ファン人口見込み数値、および観客動員数見込み数値の比較より、バファローズおよびスワローズに関する移転先候補地域の優先順位は、いずれも、1位：北信越、2位：南九州、3位：四国という結果になった。

また、今回の分析ではイーグルスを用いたが、イーグルスのフランチャイズ本拠地スタジアム（Kスタ宮城）の座席数が約2万5千人と少ない為、仮に本稿で取り上げたフランチャイズ移転候補地域に3万5千人以上集客可能なスタジアムを建設した場合は、バファローズが四国へフランチャイズ本拠地移転を行なった場合でも、現在より観客動員数が増加すると思われる。

第4節 フランチャイズ移転先推計ファン人口

推計ファン人口の増減見込みについては、近年フランチャイズ移転を行った球団に関するファン人口の推移を参考に、移転先ファン人口の算出式を導き出した。もちろん、フランチャイズ移転においては、球団の経営姿勢や試合の勝敗なども大きな要素として含まれているが、本稿では仮に、バファローズとスワローズがイーグルスやファイターズのように移転先で球団経営を行った場合を想定して、数値を算出している。

また、今回導き出すファン人口については、2004年にフランチャイズ都市を東京から北海道へ移転させた「北海道日本ハム・ファイターズ」、および2005年に新規参入ながら実質的には「大阪近鉄バファローズ」の大阪から宮城県へのフランチャイズ都市移転ともとれる「東北楽天ゴールデンイーグルス」の事例より、10年前と現在のファン人口増減率を分析し、その結果をあてはめる為、理論的には移転地域における10年後のファン人口を算出した。

第1項 ・オリックスのファン人口予測

オリックスの移転後のファン人口予測は分析の結果、北信越地方で3,755,926人、四国地方で2,205,300人、南九州地方で2,569,732人という結果となり、オリックスの現状のファン人口である546,634人よりも大幅に増加する見通しとなった。

ファイターズが移転後に、北海道地区のみで約300万人のファン人口を抱えるようになった事を考えると、決して難しい数字ではないと思われる。

第2項 ・スワローズのファン人口予測

スワローズの移転後のファン人口予測は分析の結果、比較対象であった「日本ハムファイターズ」の関東地域におけるファン人口が21万5千人と余りにも少なかった為、現実的な数値へとなるよう重み付けを行った結果、北信越地方で2,148,682人、四国地方で1,261,603人、南九州地方で1,470,086人となり、現在ファン人口が1,335,257人であるスワローズにとって移転後に目標とするにあたって、非常に現実的な数値となった。

以上の結果より、フランチャイズ移転を行った場合のファン人口予想を行ったが、北信越、四国、南九州という都道府県人口が決して多くない地域でも、十分に新規ファンを獲得できる可能性があると考えられる。

第5節 移転先観客動員数予想について

観客動員数の予測については、移転後のプロモーション活動の有無、およびスター選手が存在や試合の勝敗によっても大きく左右される事を理解した上で、今回は過去にフラ

ンチャイズ移転を行った球団の移転前後 5 年間の観客動員数から、移転後の予想観客動員数を導き出した。

バッファローズは過去大阪を本拠地として、移転を行った「南海ホークス」と「近鉄バッファローズ（イーグルス）」の 2 球団を対象球団とした。また、スワローズについては、過去東京を本拠地としていた「日本ハムファイターズ」を対象球団として取り上げた。

第 1 項 ・オリックスの観客動員予測

オリックスの移転後の観客動員数予測は分析の結果、北信越地方で 1,672,499 人、四国地方で 984,960 人、南九州地方で 1,146,272 人という結果となり、現在の観客動員数が 1,287,249 であるオリックスにとっては、使用するスタジアムのキャパシティー次第で、3 地域とも十分に現在の観客動員数を上回る可能性があると考えられる。

第 2 項 ・スワローズの観客動員予測

続いて、スワローズの移転後の観客動員数予測は分析の結果、北信越地方で 1,845,199 人、四国地方で 1,086,665 人、南九州地方で 1,264,634 人という結果となり、現在の観客動員数が 1,283,734 人であるスワローズにとっては、東京でジャイアンツやその他首都圏の球団とファンの奪い合いを行うよりも、新天地でファン獲得を行っても十分現在のファン数を確保できると考えられる。

以上、観客動員予測を行ったが、前述の通り、四国地域には独立アイランドリーグも存在しており野球熱は高いと思われる。また、過去にプロ野球がフランチャイズを置いた経緯もないことから、地域における唯一の存在となることで、バッファローズ、スワローズともに十分に現在の観客動員数を上回る事が可能であると考えられる。

第 6 節 MLB および NPB におけるフランチャイズ移転効果について

フランチャイズ移転先候補地の優先順位を決めるにあたって、まず最も重要と考えられるのがやはり移転地域の人口である。2009 年の人口を比べると、北信越地方が約 683 万人、四国地方が約 401 万人、南九州地方が約 467 万人と、北信越地方が他の 2 地域と比べ約 200 万人以上も上回っている。また、全国都道府県のプロ野球ファン人口調査からも、上述の 3 地域は都道府県人口に対するファン人口の割合にさほど差がない事が明らかとなっている。さらに、地域のプロ野球ファン人口や、都市のフランチャイズ球団誘致に伴う優遇制度などについても NPB においては、前例がない為、現段階で優遇措置を要因に入れる事は望ましくないと考えられる。

以上の考察より、フランチャイズ都市移転先候補の勇千住にとしては、まず北信越地方、次に南九州地方、最後に四国地方となる。

第7節 フランチャイズ移転のポイント

本研究の結果からも明らかなように、MLB および NPB とともに、移転前後の観客動員数変化を分析した結果、一部の例外を除き、全ての球団について移転後の方が観客動員数は増加している。ただし、MLB に関しては、フランチャイズ移転後の 10 年間から 13 年間に最も観客動員数が減少する結果となっていることから、フランチャイズ移転後の 10 年間から 13 年間で観客増加施策を移転後の早い段階から検討する事が望ましい。

対して、NPB の今までの事例では、移転後に急激に観客動員数が減少するといったことはほとんどなく、むしろ年々増加している。よって、NPB 球団こそ移転をするべきだと考える。近年移転を行ったイーグルスとファイターズの事例を見ると、移転初年度と比べ、2 年目の観客動員数が一時的に落ち込むが、3 年目以降は順調に増加している。今後 NPB 球団がフランチャイズ移転した後、2 年目に観客動員数が一時的に減少したとしても慌てることなく、3 年目以降の中長期的な経営視点で球団の運営、および観客動員施策を実行する事が望ましいと考えられる。

また、MLB がフランチャイズ移転を行う地域に、既にメジャー4 大スポーツのフランチャイズチームが存在するかどうかを調査した。しかし、メジャー4 大スポーツリーグの有無と MLB 球団のフランチャイズ移転との因果関係は見られず、各オーナーは他のスポーツをさほど意識していなかったと推測される。このことから、アメリカに比べ、さらにメジャーなスポーツリーグが少ない日本の NPB 球団がフランチャイズ移転を行う場合、J リーグなどの他のスポーツチームの有無を重要視する必要はないと思われる。

第8節 オーナーの意思

MLB のフランチャイズ移転球団に関して、移転前後の観客動員数および試合の勝敗をもとに、移転成功球団を定義した。その結果、MLB では「ブレーブス」、「アスレチックス」、「ジャイアンツ」および「ツインズ」を成功球団とした。それらの球団に共通する事項を調査した結果、移転時にオーナーが球団経営にどのように関わっていたのかが重要なポイントであると推測される。例えば、ブレーブスは移転の為に自らホームグラウンドを売却して、新天地へと積極的にフランチャイズ移転を行っており、ツインズにおいても球団の経営改革案および移転計画をしっかりと練った上で、フランチャイズ移転に踏み切っている事が分かってきた。また、これらの成功球団は移転時にオーナーが交代しておらず、球団の身売りといったやむを得ない状況で移転しているわけではない。MLB 球団には身売りによる移転は少なく、自分たちで球団経営を改善していこうとするオーナーの意思が感じ取れる。

一方、NPB における移転は、ライオンズ、ホークス、イーグルスのいずれの場合も球団の身売りや球団消滅がきっかけとなって移転しており、MLB 球団とは移転に至る背景が異なる。

っている。2004 年に北海道に移転したファイターズはオーナーの交代はなされておらず、MLB 球団のような意思を持った移転であったと言える。そして、序論でも述べたようにファイターズは現在、最も成功している球団の一つである。

以上の結果より、フランチャイズの移転を行うにあたり、オーナーの球団経営に対する姿勢、意思は非常に重要であると考えられ、NPB におけるフランチャイズ移転においても、オーナー（企業）が確固たる球団経営のビジョンを持ち、収益を拡大する為に積極的な運営を行う事が、球団の将来的成功をもたらすと推察される。

第6章 結論

本研究は、NPB 活性化に向けた改善策の一つとして、NPB 球団の中で観客動員数、およびファン人口における不振球団を抽出すると共に最も効果が高いと思われるフランチャイズ移転候補地域を考察した研究である。

・第一章では研究に至った背景と研究目的を述べた。

1999 年から 2009 年までのパ・リーグ各球団の観客動員数から、ファイターズのフランチャイズ移転時期である 2004 年以降の観客動員数が 146% と最もパ・リーグ内で増加している事が分かった。この結果より、筆者はプロ野球球団の観客動員数増加に関して、フランチャイズ移転が影響を与えているのではないかと考えた。

次に、先行研究の調査を通して、これまでにフランチャイズ移転における移転候補地域の選定や移転後のファン人口、および観客動員数の予測を行った研究事例が少ない事から、本研究の必要性を確認した。

本研究の目的は、NPB 活性化に向けた改善策の一つとして、「フランチャイズ本拠地の移転」に焦点をあて、不振球団の移転候補地域を選定し、NPB における効果的なフランチャイズ移転の有り方を提言する事とした。

・第二章は研究手法を述べた。

NPB における観客動員数および、ファン人口の増減率を分析し、不振球団を抽出した。

不振球団を特定するにあたり、フランチャイズ地域の人口に対するファン人口の割合が低く、さらに 2009 年度観客動員数が低迷している条件を満たす球団を抽出した。

次に、既存球団のフランチャイズ地域以外の都道府県の中から、人口に対するプロ野球ファン人口の割合が高い地域を抽出し、フランチャイズ移転候補地域の抽出を行なった。

また、MLB および NPB におけるフランチャイズ移転成功球団の分析を行なう中で、移転後

の観客動員数推移や、移転地域における 4 大スポーツチームの有無について確認を行うなど、今後 NPB のフランチャイズ移転において参考となる共通事項の抽出を試みた。

・第三章は研究結果である。

都道府県人口に対するファン人口、および観客動員数の 1999 年と 2009 年の数値比較、分析を行なった結果、「バッファローズ」と「スワローズ」を不振球団とした。

次に、不振球団の移転候補地域の抽出作業を行なった。候補地に選定される条件としては、周囲にプロ野球球団が存在しないこと、ならびに、都道府県人口に対するプロ野球ファンの人口が低くない事を条件にあげた。その結果、「新潟県」「富山県」「石川県」「長野県」の 4 県をまとめた「北信越地方」、「徳島県」「香川県」「愛媛県」「高知県」の 4 県をまとめた「四国地方」、および「熊本県」「宮崎県」「鹿児島県」の 3 県をまとめた「南九州地方」の 3 地域を移転候補地域として抽出した。

・第四章も研究結果を述べる。

MLB および NPB におけるフランチャイズ移転後の観客動員数の成長率、および勝率の成長率という 2 項目より、その数値のいずれもが他の移転球団と比べ高い球団を「移転成功球団」として定義した結果、MLB では、「ブレーブス」、「アスレチックス」、「ジャイアンツ」、「ツインズ」の 4 チームが該当しており、NPB では「ホークス」と「ライオンズ」が抽出された。

また、移転成功球団について、フランチャイズ移転時の背景とオーナーの関わり合い方を分析した結果、MLB ではいずれの球団もオーナーが新天地へのフランチャイズ移転による売上拡大を求め、積極的にフランチャイズ移転を行っていた事が明らかとなった。一方、NPB における成功球団の事例を見てみると、フランチャイズ移転の理由は実質的な経営破綻であり、球団の売却とあわせてオーナーの交代が行なわれている事が分かった。

・第五章では考察を述べる。

本研究結果から得られた知見を整理し、プロ野球界が発展していく為の NPB における効果的なフランチャイズ移転の有り方について考察した。

バッファローズとスワローズが、仮に移転候補地域にフランチャイズ移転を行なったと想定した場合の推計ファン人口と推計観客動員数を導き出した結果、いずれの移転候補地域でも唯一の存在となることで、バッファローズ、スワローズともに現在のファン人口、および観客動員数を上回る事が可能であると考察される。

また、フランチャイズ移転時のオーナーの状況を分析した結果、フランチャイズの移転を行うにあたり、オーナーの球団経営に対する姿勢、意思は非常に重要であると考えられ、NPB におけるフランチャイズ移転においても、オーナー（企業）が確固たる球団経営のビジョンを持ち、収益を拡大する為に積極的な運営を行う事が、球団の将来的成功をもたらす

と推察される。

更には、MLB におけるフランチャイズ移転後の観客動員数推移を分析した結果、移転した全ての球団に共通して、移転後 10 年から 13 年の間に最も観客動員数が落ち込むことが判明した。この結果より、バッファローズおよびスワローズがフランチャイズ移転を行う際にも、10 年後を見越した対策、プロモーション活動を行なうことが重要であると考察される。

以上、今後の日本プロ野球発展に向けたフランチャイズ移転の可能性について分析を行った。その結果、NPB がより発展していく為には、ダブルフランチャイズの関係にあるオリックスとスワローズが「北信越」、「四国」および「南九州」のいずれかへ本拠地を移転させる事で、現在よりもファン人口および観客動員数を増加させる事が十分に可能である事が確認できた。また、幅広い地域にプロ野球球団がフランチャイズを置き、日本の全体をカバーすることにより、潜在的なファン人口の拡大へと繋げる事が、今後のプロ野球界の発展にとって重要であると考えられる。

今回の研究では、球団がフランチャイズ移転を行う際、その成功確率を高める為、注力すべき具体的な取り組み内容までの提言を行なうには至らなかった。また、MLB および NPB におけるフランチャイズ移転後の観客動員数の増減に関して、その原因解明までには至らなかった。今後これらの課題を解明する事で、より一層日本のプロ野球発展に繋がると信じて、今後の研究課題としたい。

最後に日本プロ野球界発展の為に、本研究が少しでも貢献出来れば幸いである。

6. 謝辞

今回このような論文（リサーチペーパー）を制作するにあたって、非常に多くの方々の協力や、お力添えのおかげで、完成までにこぎつけることが出来ました。関わって頂いた全ての方々には感謝の意を申し上げたいと思います。

本論文を執筆するにあたり、指導教員である平田竹男教授には、本稿に対する助言はもちろんのこと、構想段階から研究、そして執筆方法と実に様々な面に至る部分まで親切丁寧にご指導頂き、研究活動を支えて頂きました。平田教授に御指導に心より感謝の意を申し上げます。

そして、平田研究室ゼミ生皆様にも様々な点で協力して頂きました。特に川名氏、佐藤氏の協力がなければ本論文の完成はありませんでした。深く感謝の意を述べさせていただきます。また、平田研究室同期の東氏、江口氏、桑田氏、新熊氏、鈴木氏、中山氏、丸山氏、利渉氏、渡辺氏にも色々と協力して頂きました。同期の皆にも心の底から感謝しております。

関係して下さったすべての方々の今後のご健康とご発展を祈念して、本稿を締めくくらせていただきます。

【参考文献・資料】

- ・宇佐見陽著,「大リーグと都市の物語」,平凡社新書 (2001)
- ・新井啓著,「プロ野球と経済 2009」,開成出版 (2009)
- ・佐野正幸著,「パ・リーグどん底時代 激動の昭和 48 年」,長崎出版 (2009)
- ・「週刊プロ野球 セ・パ 60 周年 vol.5」,ベースボール・マガジン社 (2009)
- ・「週刊プロ野球 セ・パ 60 周年 vol.25」,ベースボール・マガジン社 (2009)
- ・日本プロ野球機構オフィシャルサイト,ホームページ (<http://www.npb.or.jp/>)
- ・パシフィック連盟オフィシャルサイト,ホームページ (<http://pacific.npb.or.jp/>)
- ・パシフィックリーグマーケティング独自調査(ネットサーチ 2009)
- ・兵庫県/県統計 人口関連データ,関連資料 「総務省 推計人口 時系列 Excel ファイル」,
ホームページ (http://web.pref.hyogo.jp/ac08/ac08_5_000000041.html)
- ・
- ・高津ゼミナール ウェブサイト,活動記録 プロスポーツと地域振興-日本ハムファイターズとコンサドーレ札幌 第3章, ホームページ
(<http://www.soc.hit-u.ac.jp/~kozu/activity/sapporo.html>)
- ・都道府県 人口・面積・人口密度ランキング, ホームページ
(<http://uub.jp/rnk/prnk.cgi?T=p>)
- ・(株)自治体国際化協会,「スポーツ施設と地域政策-アメリカにおけるスポーツ施設・プロスポーツ・行政の関係-」 (1997)
- ・John R. Mitrano,「The "Sudden Death" of Hockey in Hartford:Sports Fans and Franchise Relocation」, Central Connecticut State University (1999)
- ・Cocco A.; Jones J. C. H,「On going south: the economics of survival and relocation of small market NHL franchises in Canada」, Applied Economics, Volume 29, Number 11, 1 November 1997 , pp. 1537-1552(16) (1997)
- ・Michael Lewis,「Franchise Relocation and Fan Allegiance」, Journal of Sport & Social Issues, Vol. 25, No. 1, 6-19 (2001)
- ・William M. Foster and Craig Hyatt,「I Despise Them! I Detest Them! Franchise Relocation and the Expanded Model of Organizational Identification」, Journal of Sport Management, 2007, 21, 194-212 (2007)